

指導教員名

松永桂子教授 指導

論題

地域の居場所におけるコーディネーターの重要性

—まちの家事室「泉北ラボ」から探る—

学部名 商 学 部

卒業年度 令和 6 年度

学籍番号 A21CA052

氏名 かわにしももほ 川西百穂

目次

はじめに	4
第1章 コミュニティカフェのスタッフの役割と重要性	
第1節 調査の背景	6
第2節 地域の居場所としてのコミュニティカフェについて	7
第3節 コミュニティカフェにおけるスタッフの存在とその重要性	8
第2章 参与観察から見るコーディネーター	
第1節 泉北ラボとは	10
第2節 泉北ラボのコーディネーターの定義	15
第3節 泉北ラボにおけるコーディネーターの活動実態	17
第4節 活動実態から見るコーディネーターの重要性と課題	20
第3章 インタビュー調査から見るコーディネーター	
第1節 インタビュー調査概要	23
第2節 インタビュー調査から見るコーディネーターの重要性	25
第3節 インタビュー調査から見るコーディネーター継続の課題	31
第4章 アンケート調査から見るコーディネーター	
第1節 アンケート調査概要	34
第2節 アンケート調査結果	34
第3節 アンケート調査から見るコーディネーターの重要性と課題	46
第5章 地域交流拠点におけるコーディネーターの重要性と課題	
第1節 過去、現在、利用者視点から見るコーディネーター	48
第2節 コーディネーターについての課題	49
おわりに	50

謝辞	50
参考文献・参考資料	51
付録①	53
付録②	56

はじめに

現代では、人と人とのつながりが薄れ、地域コミュニティが希薄化している。実際、筆者の住む地域でも、子供会くらいしか地域の住民が関わる機会はなく、小学校を卒業し子供会から縁がなくなると地域住民との関りはほとんどない。マンションでは隣の住民の顔さえ分からないことが当たり前となっている。地域コミュニティの希薄化は、高齢者の孤独死や子育てで頼れる人がいない状況を作り出すなどの地域課題を浮かび上がらせる。

そこで、地域コミュニティの再生に貢献する地域交流拠点や居場所が求められる。倉持は「地域課題を解決することを目的としたコミュニティカフェという場所が地域のつながりを再構築するのに重要である」と述べている¹。また、「そのような場所が単にあるというだけではなく、その場で常駐するスタッフの存在が重要であり、地域の人をコミュニティカフェ内外でつなぐことが役割である」と述べている²。研究の目的は、地域交流拠点として地域に根付いている泉北ラボという施設で参与観察、インタビュー調査、アンケート調査をしながら、地域交流拠点におけるスタッフ、泉北ラボではコーディネーターと呼ばれる存在について、その重要性と課題を探るとともに、現場から具体的なアプローチ方法を学び、コーディネーターを配置する居場所や地域交流拠点での地域コミュニティ再生に貢献したい。

まず第1章にて、地域のコミュニティ減少に伴う居場所の重要性について書き、居場所を運営する中で重要であるコーディネーターについて、定義と役割、そして重要性についての仮説を提示する。第2章では、泉北ラボの紹介と泉北ラボにおけるコーディネーターについてまとめる。実際に泉北ラボのコーディネーターとして働く筆者の経験を書き、泉北ラボにおけるコーディネーターの重要性と課題を示す。第3章では、泉北ラボで実際に今までコーディネーターをされていた方、現在のコーディネーター、泉北ラボを運営する泉北まちと暮らしを考える財団の乗組員、コーディネーターとしても動いているシェアキッチンのカフェスタッフ、泉北ラボ以外でコーディネーターとして活躍されている方、泉北を起点としてまちでプレイヤーとして活躍される方にインタビューを行いコーディネーター

¹ 倉持香苗(2014)「コミュニティカフェと地域社会—支え合う関係を構築するソーシャルワークの実践」株式会社明石書店,p.20

² 同上 p.42

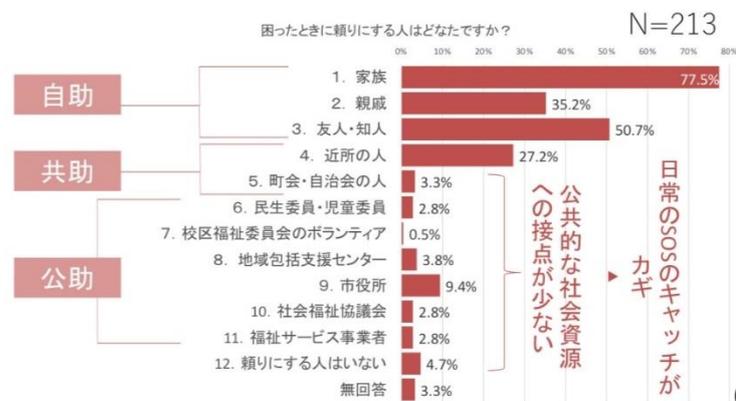
ターの重要性と課題を示す。第4章では、泉北ラボの利用者に対して行ったアンケート調査の結果を記載し、利用者から見たコーディネーターや泉北ラボについてまとめ、コーディネーターの重要性と課題を示す。第5章では、自身の活動、コーディネーター、利用者の3点から見てきた泉北ラボ、コーディネーターについて振り返り、それぞれの視点を組み合わせることで見えてきたことを書き記す。

第1章 コミュニティカフェとスタッフの役割と重要性

第1節 調査の背景

高度経済成長を経て、わが国は地域の希薄化、高齢化、過疎化、郊外化などの変容が起
こり、街の中心部のにぎわいを衰退させただけでなく、近隣の間人関係にも大きな影響を
与えた。また、女性の社会進出や核家族化などにより従来の生活様式が変化した。子育て
経験者が家庭におらず、地域コミュニティも希薄化して近隣に頼れる人がいないため、独
りで子育てをしなければならず不安を抱えるという状況になっている³。

表1 困った時に頼りにするのはどなたか



出所 宝楽(2023)『まちの家事室「泉北ラボ」を起点にコロナ禍の「見えない孤立」に挑
む、自走型自治モデル報告 2021-2023』

表1を見ると、困った時に頼るのが家族・友人・知人がほとんどで、社会資源への接続
がされず社会的孤立が起こっていることが分かる。また、戦後から現代にかけて制度や法
律が整備されて生活しやすい環境になったように見えるが、高齢者、子育て中の母親、不
登校生徒、仕事のない若者などの地域からの孤立が課題になっている。こうした課題は、
既存の制度に当てはまらない、サービスの利用時間内に都合が合わない、同じ課題を抱え
る対象者ごとのサービスであるため多世代との交流ができないなど、制度の狭間にあつた
り、あるいは制度で補いきれなかったりすることがある。これらの人々に対しては、地域

³ 同上 p.15

で互いに支え合うことができる関係を構築して、その地域の状況にあった制度やサービスを共に作り出す姿勢が必要だと考えられる⁴。

人と人とのつながりをつくり出し、地域コミュニティを再構築するための手段として、「居場所」が挙げられる。田中(2021)は、「居場所は、既存の制度や施設の枠組みでは上手く対応されない要求に対応するために開かれてきた場所」と述べている⁵。明確な理念を掲げ、訪れた人それぞれの要求に対応していくことで機能が備わり、豊かな場所へ育っていくと述べられている。倉持は、いつでもだれもが気軽に訪れ、自由に過ごせる場所であり、経験や能力を活かして主体的にかかわることで自己を開放し、自己実現を図ることが出来る場であると述べている⁶。居場所は、利用者の悩みを解消したり、経験・能力を活かして関わったりして、コミュニティを作りながら社会的孤立を解決していく可能性がある場所だと分かる。

このような居場所の一つとして、「コミュニティカフェ」という施設が注目されている。

第2節 地域の居場所としてのコミュニティカフェについて

コミュニティカフェについて、倉持(2014)は「飲食を共にすることを基本に、誰もがいつでも気軽に立ち寄り、自由に過ごすことが出来る場所」と定義している⁷。コミュニティカフェの中には、喫茶店と同様の場所として開業している場所もあるが、今回は何らかの課題に注目し、その課題の解決を目指して運営されている住民の活動拠点の一つとしてのコミュニティカフェを捉える⁸。倉持(2014)より、コミュニティカフェには次のような特徴があることが分かる。まず、法制度の機能不全と経済低迷で多様な地域課題があふれている中、公的なサービスに限界が生じている。公的機関が実施しない福祉サービスを一時的に変わって実施するための場所として、コミュニティカフェが運営されているという特徴がある⁹。次に、居場所としてコミュニティカフェを設置し交流する中で、個人や地域の課

⁴ 同上(2014) p.16

⁵ 田中康裕(2021)『わたしの居場所、このまちの。制度の外側と内側からみる第三の居場所』株式会社水曜社,p.258

⁶ 倉持(2014) p.134

⁷ 同上 p.30

⁸ 同上 p.4

⁹ 同上 p.78

題に目を向けざるを得なくなる。課題解決に働きかけるなら、コミュニティカフェは地域の拠点の一つとなり、まちづくりの活動に発展する場となる可能性がある¹⁰。また、課題解決の際に、地域課題に目を向けて他機関との連携を生むアプローチが必要となることも多く、コミュニティカフェ内外のネットワークを構築して個人及び地域課題を解決する役割を担っている¹¹。最後に、コミュニティカフェでは利用者を限定せず、多世代、また地域から排除されがちな人との交流や情報交換が行われる。それらの人たちが相互に協力し合いながら互いに協力できるように働きかけ、スタッフと利用者が共に場を作り出すことで、利用者もコミュニティカフェのスタッフ自身も互いに影響を与えて共に変化する。このようなコミュニティカフェが地域に根付くことで、地域も変化していくことになる¹²。このようにコミュニティカフェは、公的サービスに当てはまらない、利用できない人たちを救うサービスを生み出し、カフェ内外のネットワーク構築による個人・地域課題を解決し、カフェを起点にスタッフや利用者に変化することで地域にも変化をもたらす可能性がある場所だということが分かる。

第3節 コミュニティカフェにおけるスタッフの存在とその重要性

コミュニティカフェは単に場所を作っただけでは、第2節で示した公的サービスに当てはまらない、利用できない人たちを救うサービスを生み出し、カフェ内外のネットワーク構築による個人・地域課題を解決し、カフェを起点にスタッフや利用者に変化することで地域にも変化をもたらす可能性がある場所になるわけではない。そこには利用者同士をつないだり、利用者と地域をつないだりと調整、仲介する存在が必要とされる。倉持(2014)は、コミュニティカフェのスタッフについて、「スタッフがただその場にいるだけではコミュニティカフェになりやすく、福祉コミュニティの機能も生まれにくいのではないかと考えられる。スタッフが不在であれば、人的交流が生まれ、情報が交換されるまでには時間がかかるのではないだろうか。」と述べている¹³。このように、スタッフが拠点にいることが、地域課題を解決し、住民同士の関係性を構築するのに大きな役割を果たしているこ

¹⁰ 同上 p.130

¹¹ 同上 p.116

¹² 同上 p.134

¹³ 同上 p.137

と分かる。

倉持(2014)より、このスタッフがコミュニティカフェにおいて重要であるというのは、次の2点から考えられる。1点目は、個を受け入れ、個人の特技や長所を活かせるように利用客が持つ力を引き出しながら、スタッフと利用者が互いに影響を与え合いつつ共に場を作り出す点である。共にコミュニティカフェを作り出すことで、コミュニティカフェがスタッフにとっても利用者にとっても自己実現の場となると考えられる。このような自己実現の活動は、仲間を集め、やがて地域組織を巻き込んだ活動に発展する例もある¹⁴。2点目は、利用者同士、利用者と社会資源など「何かと何かをつなぐ」点である¹⁵。コミュニティカフェは通常の飲食店と違い、人的ネットワークの広がりの特徴がある。つながって助け合える関係ができれば安心して暮らせる地域を実現することができる。カフェ内外でのつながりを作り出す橋渡し役としてスタッフが重要であると考えられる。個を受け入れること、利用客が持つ力を引き出すこと、つながりを作り出す橋渡し役についてはスタッフとして人がいるからこそできることである。スタッフが上記の2点の役割を果たすことで、コミュニティカフェが地域コミュニティの構築と社会的孤立の解決に貢献すると考える。

このコミュニティカフェのスタッフ的な立ち位置として、コーディネーターというスタッフを置く泉北ラボと呼ばれる居場所がある。筆者の泉北ラボでの活動実態や過去のコーディネーターへのインタビュー、また利用者からのアンケートより、上記の2点から居場所においてコーディネーターの重要性を示し、コーディネーターが居場所で活躍することが地域コミュニティの形成、社会的孤立の解決に貢献することによって必要かついて考える。また、スタッフの課題を捉えることで、スタッフを配置する居場所やコミュニティカフェにおいて継続的に場所を持続していくために必要なことを考察する。

¹⁴ 同上 p.27

¹⁵ 同上 p.122

第2章 参与観察から見るコーディネーター

第1節 泉北ラボについて

泉北ラボとは、自由なくつろぎとつながりが生まれる「私設の公民館」である。小さな「やりたい！」をやってみたり、隣にいる、その人とあいさつして少しおしゃべりしてみたり、ヒト・コト・モノが会う「広場的空間」だ。泉北ラボは、公益財団法人泉北まちと暮らしを考える財団が居場所事業として運営している¹⁶。

写真1 泉北ラボ外観(筆者撮影)



写真2 泉北ラボ内観(筆者撮影)



泉北ラボを運営する「公益財団法人泉北まちと暮らしを考える財団」(以下泉北財団)は、30・40代が集まり新しいライフスタイルの実現を目指して生まれたコミュニティ財団である。住民のチャレンジを下支えし、新たな地域課題に気づき、行動する人が増えるように、そして自分たちのまちがより住みやすくなるように、「温かいお金」が地域で回る仕組みづくりをしている¹⁷。泉北財団は2020年2月3日に設立している。泉北ラボの運営資金としても、泉北財団の事業費の一部として運営資金を拠出している。

泉北ラボは、大阪府堺市南区に位置し、泉北高速鉄道泉ヶ丘駅から東に徒歩10分ほど歩いた距離にある。大阪健康福祉短期大学の敷地内にあり、この大学の教育・交流・防災機能等の将来ニーズに対応する拠点を目指して準備が進む「シェアタウン泉ヶ丘ネクスト」の連携パートナーとして、泉北財団が泉北ラボを通じた地域交流拠点を運営してい

¹⁶泉北まちと暮らしを考える財団ホームページ「泉北ラボプロジェクト詳細」 [泉北ラボプロジェクト詳細 | 泉北のまちと暮らしを考える財団](#)(2024年12月19日閲覧)

¹⁷「泉北ラボ配布資料」

る。2022年1月17日に設立され、日曜日と祝日を除く週6日9:00~18:00で開設している。第2金・土曜日は夜カフェとして21:00まで営業している。



写真3 大阪健康福祉大学敷地(筆者撮影)

門をくぐり左に社会福祉法人が経営する風のこもんず、右手に泉北ラボ、その奥に大阪健康福祉大学がある

泉北財団は、泉北ラボを起点に社会的孤立の解決を目指している。泉北財団が2019年に実施したアンケート調査(表1)によると、共助や公助の社会的資源に接続している人が少なく、また家族構成に関わらず一人で子供を見ていると感じる方が多い。このように、近年問題となっている孤独・孤立というテーマについて、地域課題の把握のためのモデルハウスとしての泉北ラボの実現を掲げている。多数の機能に関わる入り口を複数用意し、コーディネーターによる日常会話などによって住民のお困りごとをキャッチして、必要な社会的資源につなげることで課題解決を目指している。特に泉北ラボでは課題を拾う入り口としての役割が大きい。

建物は木を基調としており、薪ストーブもありおしゃれで落ち着いた空間が作られている。建物内だけでなく、軒下のテーブルとイスも利用することができ、裏手にはコミュニティフリッジが設置されている。

泉北ラボは、①シェアキッチン(Yyカフェ)、②レンタルスペース、③コワーキングスペース、④ランドリー、⑤ミシン、⑤コピー、⑥みんなの本棚、⑦コミュニティフリッジの主に7つの機能がある。以下、それぞれの機能の説明を行う。

①シェアキッチンについて、泉北ラボがある堺市南区高倉台出身である山中勇也さんが共同運営パートナーとしてYycafeを運営している。カフェは泉北ラボに訪れる入り口として重要な要素である。カフェが落ち着いているタイミングでコーディネーターのような動きもしている。

写真4 Yycafe カウンター (筆者撮影)



②レンタルスペースは、泉北ラボを4つに区切って1区画2時間1500円でレンタルスペースとして利用することができる、市民活動支援の取り組みである。この機能により、住民さんのやってみたい！を実現することができる。お教室やマルシェイベント、体験会などに利用されている。現在は定期利用のレンタルスペースが7件と、月によってマルシェイベントや団体の集まりに利用されている。

写真5 レンタルスペース「介護美容ケアビューティー」開催の様子(筆者撮影)



③コワーキングスペースは、1時間150円、もしくは1日1000円で使用可能。ロフト形式になっている2階にあり、机に付属しているモニターや電源も無料で使用することができる。

写真6 コワーキングスペース(筆者撮影)



④ランドリー、ミシンは家事支援の機能である。洗濯機・乾燥機がそれぞれ三台ずつあり、洗濯 500 円、乾燥 500 円で利用することができる。所要時間は洗濯が 1 時間、乾燥が 2 時間で、当日中に取りに来てもらう形になっている。洗濯機が壊れたという方や、カーテンや毛布など大きめの洗濯物を干す場所がないため乾燥ついでに洗濯を利用するといった形で使う方がいる。また、現在はあまり稼働できていないが、ミシンを使うこともできる。

写真7 ランドリー(筆者撮影)



⑤コピー機でコピーをすることもできる。使い方が分からない方はスタッフと一緒に操作し、使ったことがある方は使用後に印刷枚数と種類を報告し支払う。 coworkingスペースと合わせて、比較的安価な価格設定であることから、立地以外で来る動機を作り出

している。

⑥みんなの本棚は、利用者の寄付で成り立つ本棚である。単なる寄付ではなく、利用者がおすすめしたいと思うとおきの本を3冊まで寄付してもらう。寄付の際におすすめポイントを記すカードを記載し、読者に寄付者の思いや感動ポイントなどを伝えることができるようになっている。

写真8 みんなの本棚(筆者撮影)



⑦コミュニティフリッジは、ひとり親家庭など、生活に支援が必要とされる子育て世帯が24時間人目を気にせず食料品・日用品を取りに来ることができるフードバンクだ。食料品・日用品は寄付によって提供されており、だれもがいつどんな状況に陥るか分からない中、お互いさまの気持ちで支え合える仕組みづくりがなされている。泉北ラボを利用するついでなどに提供品をもってきてもらい、スタッフが受取後登録作業をして陳列する。利用者はスマートフォンで電子ロックができるようになっており、コミュニティフリッジ自体建物の裏手にあるため、顔を合わせることなく中に入ることができ、好きな食料品・日用品を持って帰ることができる。利用条件は子育て中の世帯で、児童扶養手当、就学援助受給者が対象となっており、利用開始前に電子ロックの登録や利用方法の説明を兼ねた面談を行う。

写真9 コミュニティフリッジ外観



写真10 コミュニティフリッジ内観



上記のように、カフェに加えて家事支援や市民活動支援の機能を備えることで、多様な目的の人たちが集う広場的空間を実現している。しかし、機能自体が存在するだけでは広場的空間が持続していくことが難しい。上記の機能を維持していくためにも、コーディネーターと呼ばれる存在が大きな意味を成している。

第2節 泉北ラボのコーディネーターの定義

泉北ラボのコーディネーターについて、泉北財団代表の宝楽氏(2023)が報告書にて述べていることをまとめる。

泉北ラボのコーディネーターはランドリーの使い方の紹介や、お客様の案内などの接客が主のボランティアである。ノウハウ蓄積中で募集はしておらず、能力と条件にマッチしている人に声をかけている¹⁸。(現在はユースサポートセンターとして、大学生が大学外でのまちづくりの現場を知ることができるインターンとしてコーディネーターの募集も行っている。)

コミュニティビジネスとして、単一事業で回るような施設は地域のマーケットでは難し

¹⁸ 宝楽陸寛(2023)「まちの家事室「泉北ラボ」を起点にコロナ禍の「見えない孤立」に挑む、自走型自治モデル報告 2021-2023」サロン文化舎,p.12

いだろうから、いくつかお金になるような事業を3つくらい重ねた方がいい中で、人件費に注目し、仕入れを下げるというアイデアを用いた。泉北ラボを使いこなせる人に、1日自由に使用していいからコーディネーターをお願いしますとこれまでに7人の方にコーディネーターをしてもらっている¹⁹。

求める条件は、「世間話を誰とでも話せること」である。理由は、「ヒト・モノ・コトが
 出会う広場的空間」を目指す泉北ラボを使いこなしてくれる、すなわち誰かを巻き込んだり紹介したりしつつラボを利用してくれる人を増やしたいから。泉北ラボを使いこなしてくれる人が増えると、関係人口が爆増し、困りごとややってみたいがより集まり、泉北ラボ自体が回っていくようになる²⁰。

そんな泉北ラボのコーディネーターに求められることが3つある。1つ目は、世間話
 すること。こんにちとはあいさつした後に場所のコンセプトを話す、またイベントの紹介
 やHello 泉北ラボを見てコミュニケーションすることで、ラボを利用する人が勝手に増えて
 いくことを狙っている。

図1 Hello 泉北ラボ表紙・裏表紙



図2 Hello 泉北ラボ中面



2つ目は、打ち解けることで課題に対処すること。何度か来てくださった利用者さんから、悩みを打ち明けてもらえることがある。日頃から打ち解けている環境でしか、打ち明

¹⁹ 宝楽陸寛(2023) p.12

²⁰ 宝楽陸寛(2023) p.12

け話をするのは難しいので、日常会話など地道にコミュニケーションをとって話しやすい環境を作ることによって課題に対処できるようにする。

3つ目は、泉北ラボの顔が毎日変わることで、毎日いろいろな人の話しやすい場所になるようにし、相談できる場所となることでカフェをきっかけにつながりが広がることを目指す²¹。

現在は、財団の乗組員として働きながらコーディネーターの立ち位置として動いている筆者自身と、子育て子育て相談会を開催されている方、合わせて2名がコーディネーターとして活動している。また、財団の代表宝楽氏と、乗組員の穂積氏も財団の業務を行いながらコーディネーターとして動いており、また Yycafe の山中氏もカフェを営業しつつコーディネーターとして泉北ラボのコーディネーター業務を行っている。

第3節 泉北ラボのコーディネーターの実態

泉北ラボにてコーディネーターの重要性を調査するために、筆者自身コーディネーターとして活動しながら参与観察を行った。コーディネーターとしての活動期間は2024年8月1日から本論文執筆中まで、活動は2025年3月まで続ける予定である。期間中、主に週4日平日8:30~13:00までコーディネーターとして活動しながら調査を行った。

まず、主に担当した業務について記載する。主に8つの業務に分けられる。

まず1つ目が、コーディネーターの大きな存在意義である利用者さんへの声掛け、案内、世間話である。泉北ラボに入ってきたタイミングで「こんにちは」など挨拶をし、初めての方には注文の方法などを案内する。ラボ内を興味深そうに見渡している方には、泉北ラボの機能や場所のコンセプトをしっかりお話し、カフェ利用が主な目的で来られた方には Hello 泉北ラボを渡しながらかく泉北ラボについて紹介しつつ、どこから来たかや来た目的をお聞きして少しお話しする。常連さんにはあいさつしつつ天気のお話や気になったことがあれば声をかける。アンケート調査の期間中は筆者の卒業論文についてお話し、その過程で大阪市立大学との関りや利用者の大学時代のお話をきくこともできた。チラシ

²¹ 宝楽陸寛(2023) p.13

をご覧になる方にはイベントの紹介をしたり、作業が目的で来た方にはコワーキングスペースを紹介したりと、他の機能を紹介することで少しずつ泉北ラボについて知ってもらった。

2つ目は、泉北ラボの日常運営に関わる業務である。レンタルスペースの使用がある際に準備や片付けをサポートしたり、泉北ラボの利用者を把握するためにレンタルスペースでの利用人数を記録したりする。また、ランドリーやコワーキング、コピー機使用の際にレジを担当する。これらの機能は全て人を介して会計する必要があるため、利用の際にコーディネーターに声をかけてもらい金銭のやり取りを行う。人を介してでしか会計できないことで、交流を狙っている。みんなの本棚への寄付があった際には、本棚のコンセプトを説明し、おすすめポイントを記載するカードを渡し記入をお願いする。これらすべての作業は泉北ラボの受付業務でありながら、コーディネーターと利用者のコミュニケーションのきっかけを作り出している。

3つ目は、レンタルスペースに関する業務である。まずは新規でレンタルスペースの利用を希望する方の面談を行う。泉北ラボでは、主催者の方の開催への想いを大事にし、また泉北ラボが私設の公民館であって自由に使ってほしいという点などを共有するために新規の利用者に面談を行う。面談の調整やレンタルスペースへの問い合わせのためメールのやりとりや電話対応も行う。継続してレンタルスペースを利用している方には今後の予定をメールや直接やりとりしたり、利用中でのエピソードや困った点などを聞いたりして関係を築いている。主催者の方からイベントのチラシを預かり張り出したり、チラシの整理をしたりもする。さらに、イベント情報を一括に集めたイベントカレンダーを月ごとに作成し、ラボ内での掲示とインスタグラムの投稿で発信する。最後に、レンタルスペース利用者、イベントの参加者を増やすために Hello 泉北ラボにてレンタルスペース主催者へのインタビュー連載を行っており、毎月1人、泉北ラボとの出会いや開催してよかったこと、今後の展望などを詳しくお聞きし記事を作成している。

4つ目は、コミュニティフリッジに関する業務である。まずは寄付者であるフードプレゼンターの方からの寄付品の受け取りである。営業時間中はいつでも寄付品を持参できるので、プレゼンターの方が来られたら随時対応する。単に受け取るのではなく、なぜその

提供品を持ってきてくれたのかや世間話をしながら受け取る。提供品は状態や賞味期限を確認して登録作業を行い、コミュニティフリッジ内に陳列する。在庫の管理も行い、足りない種類の商品を把握して、お金でいただいた寄付を用いた買い出しを頼む。その際、フリッジ内に掲示している利用者からの声を書かれた付箋や、泉北ラボ内で出会った利用者の方の声を拾い買い出しに必要なものの参考にする。また、スマートサプライという市民参加型の支援プラットフォームにて寄付情報を発信しているが、その際交流する中で聞くことの出来たエピソードを入れつつ、現在求めているものや寄付頂いたものの情報を発信している。

写真 11 コミュニティフリッジ寄付(筆者撮影)



5つ目は、広報に関する業務である。主に泉北ラボのインスタグラムを更新している。レンタルスペースを使用したイベント情報や、コミュニティフリッジの寄付情報をメインに、泉北ラボの情報を発信する。使用する写真の撮影や文章の作成も行うため、イベント中に参加者に声をかけたり主催者の方に開催の想いやエピソードをお聞きしたりし、得られた情報を発信している。

6つ目は、掃除である。掃除機やゴミ出し、窓ふきなどを朝一番に行う。冬場は泉北ラボで人気の高い薪ストーブの点火も行う。掃除をしつつ、登校する大学生や通りがかりのご近所さんに挨拶をする。

7つ目は、泉北ラボの裏方業務である。レジ締めや備品の整理・購入、使用後の洗濯

機・乾燥機の掃除など泉北ラボの運営に必要な作業を行う。

最後は、月次ミーティングとコーディネーター会議への参加である。乗組員として働く3名で泉北ラボの1か月ごとの振り返りと今後について話し合う会議である。主にコーディネーターとして働く筆者が泉北ラボを運営する中で出てきた業務上の疑問を解消したり、日々のルーティーン以外での長期のプロジェクトについて情報共有をしてもらったり担当する仕事を整理したりする。コーディネーター会議は、泉北ラボの乗組員、コーディネーター、泉北ラボにかかわりがある方や地域で活動されている方が参加者となる。困っている状況を抱える当事者の方への支援を考えるケース会議、チャレンジしたいことがあるけれど次の一歩が踏み出せない方の背中への押し方を考えるケース会議、泉北ラボが今より良くなるためにはどうすればいいかという視点での作戦会議の要素があり、困りごとを社会資源につなげたり、多様な利用を受け入れる可能性を掘り下げたりしている²²。コーディネーターが不足した状態が続いていたため1年ほど未開催だったが、2024年11月から再度スタートしている。月次ミーティングが日常に近いのに対して、コーディネーター会議は幅広い参加者から泉北ラボのビジョンを実現するために話し合ったり、泉北ラボを超えてのつながりを模索したりと多様な視点から泉北ラボを広くとらえた会議内容となっている。

上記の他にも、コミュニティフリッジの寄付者の増加を目指してマーケットイベントにブース出展し、その際の企画、準備の業務を行ったり、整備されていない部分の業務マニュアル作成をしたり、乗組員として理事会に出席するなどの活動も行った。

1日のスケジュールとしては、最初の1時間ほどで掃除とメールのチェックを行った後、その日の泉北ラボの利用予定や多様な目的でいらっしゃる利用者の方に合わせて仕事内容を組み合わせて1日を過ごす。

第4節 実態から分かるコーディネーターの重要性と課題

コーディネーターとして活動しながら参与観察を行い、日々様々な人と出会いたくさんのエピソードをお聞きしたり、業務をこなしたりするなかで見えてきたコーディネーター

²² 宝楽陸寛(2023), p38

の重要性と、筆者が捉えた課題についてまとめる。

まず1点目の利用者が持つ力を引き出しながら、利用者と共に場を作り出すことについては、レンタルスペースの受付、コミュニティフリッジの企画においてその重要性が示された。レンタルスペースは、利用者の持つ得意を活かして教室などを開催している。普段から利用されている方の強みを見出してレンタルスペースの開催を提案するという段階までは至っていないが、利用者のやってみたい！を挑戦できる場所として興味を持ってくださった方に、面談を通して開催の形を共に考えながら開催を後押しする。開催当日はレンタルスペース主催の方がスタッフに間違えられて機能の説明をしたり、開催後にはフィードバックをもらって共に泉北ラボを改善したりと、利用者と共に場を作り出しているといえる。レンタルスペースの開催は、主催者と利用者をつなぐ、利用者同士のコミュニティができる、泉北ラボとつながるきっかけとなるなど小さなコミュニティを作り出すことになっている。コーディネーターはこのレンタルスペースについて、主催者との交流の他に、新規利用者開拓のための発信などで開催を後押ししている。続いてコミュニティフリッジについては、2024年10月に出店したつながるDaysというイベントでのエピソードが挙げられる。つながるDaysは泉北ラボの最寄り駅である泉ヶ丘駅付近で毎年春と秋に開催されるマーケットイベントである。泉北ラボは、泉北コミュニティフリッジとして、コミュニティフリッジの寄付者を増やす周知を目的に出店した。その際、筆者と大学生2人で企画運営を行った。協力してくれた大学生のうち、1人はコミュニティフリッジに継続して寄付をしてくれている方で、もう一人は授業の一環で泉北ラボでボランティアする際にこの企画運営に参加してくれた。2人ともこの企画運営の話聞いてやってみたく感じた気持ちを実現する形で企画が進んだ。企画運営は、アイデア出しや情報収集、SNS運用などそれぞれが得意なことを分担して協力して進めた。お互いの持つ力を引き出しながら、共にイベントを作り上げたといえる。当日ボランティアとしてメンバーの人脈からスタッフとして大学生をさらに巻き込んだり、会場で周知を行うことで泉北ラボの来るきっかけを作り出すなど、コーディネーターが関わることで新たなつながりやコミュニティを作り出すことに大きく貢献した。

次に2点目の「何かと何かをつなぐ」という点である。社会資源との接続については、主にコーディネーター会議にて達成されている。コーディネーターが泉北ラボを運営する

中で気になった人の状況を共有し、泉北ラボ内外の様々な視点を持つ方と支援について模索する。また、コミュニティフリッジの利用登録時に、コミュニティフリッジでの食支援以外にもつなげられそうな支援先があればつなぐこともある。人と人をつなぐという点については、日常会話の中で泉北ラボでのイベントや教室を紹介してレンタルスペース利用者の方とのつながりを作ったり、泉北ラボに高頻度で訪れ業務の手伝いをしてくれる人達が同じ時間に泉北ラボに居合わせた際に、間に入ってつながりのきっかけを作ったりなどしている。コーディネーターとして利用者に関り、それぞれの個を理解して、つなげる人と人の両方について理解することで、お互いをつなげることに活かしている。このように、コーディネーターが泉北ラボで日常を過ごす中でエピソードをためたり、間に入って利用者同士を紹介したりすることで人と人や、人と社会資源をつなぐことに貢献しているといえる。

また、私が考えるコーディネーターの課題は次の2点である。1点目が、「悩みや得意を聞きだす」という点の言語化が難しく、また本人の特徴に合わせたやり方をする必要がある。この言語化できないノウハウを継承できない点が惜しいと考える。2点目が、共有と継続が必要な中でシステムが構築されていない点である。この点は、宝楽(2023)で利用者さんの「気になる人のカルテ」を作るという展望が述べられていた²³。しかし、悩みの種を拾ったり、困っている人をつないだりするという目的以外にも、コミュニティフリッジへの寄付を頂き、その時のエピソードをインスタグラムで発信する際にストーリーの共有が必要だったり、ポジティブ面での小さな共有や、レンタルスペース利用者の方と長く付き合う中でお互いに細かな工夫を積み上げる中で、担当が変わった時にそれを一から築く必要があるなど、スタッフ間の共有、代替わりの共有に限界を感じる。一方、コーディネーターが担当したエピソードは発信まで行うとなると時間が限られてしまうので、この点に課題があると考えます。

²³ 宝楽(2023) p.38-39

第3章 インタビュー調査から見る泉北ラボのコーディネーター

第1節 インタビュー調査の概要

本研究ではインタビュー調査を行った。調査の対象者は、泉北ラボにて以前コーディネーターをされていた方、現在のコーディネーター、泉北まちと暮らしを考える財団の代表と乗組員、泉北ラボのシェアキッチンのスタッフ、泉北ラボ以外でコーディネーターのような取り組みをされている方、地域でプレイヤーとして活躍されている方である。調査対象者への接触は、宝楽氏より対象者に許可を取りメールアドレスを提供してもらい、直接メールにて依頼した。

調査の対象期間は2024年10月から2024年12月までである。インタビューは一人当たり1時間30分程度行い、ノートとペンを用いて内容を記録した。また、許可を得て会話の内容の録音も行った。

表2は調査対象者の属性をまとめたものである。

表2 インタビュー協力者詳細

	役割	泉北ラボでの活動期間	インタビュー日
A氏	元コーディネーター	2022年のうちの半年間	2024年10月28日
B氏	元コーディネーター	開設前～2023年3月	2024年11月8日
C氏	元コーディネーター	2022年1月～2023年3月	2024年10月30日
D氏	財団乗組員	2022年10月～現在	2024年10月24日
E氏	Yycafe店主	開設前～現在	2024年12月6日
F氏	コーディネーター	2022年1月～現在	2024年12月6日
G氏	泉北ラボ外のコーディネーター	—	2024年10月30日
H氏	泉北ラボ外のコーディネーター	—	2024年11月6日
宝楽氏	泉北財団代表	開設前～現在	2024年10月25日

出所 インタビューより筆者作成

ここで、上記の協力者が泉北ラボに関わった目的を記載する。

A氏:夫を亡くし、同じ悲しみを抱えている人たちのために死別した一人親の会を立ち上げたいと宝楽氏に相談するために泉北ラボを知る。相談に乗ってもらう中で、まずはA氏自身の心を温める必要があるとして、人とコミュニケーションを取って社会復帰をするためにコーディネーターになった。

B氏:泉北財団代表が事務局長を務めるNPO法人SEINにてつながるDaysというマーケットイベントの事務局を担当していたため、その仕事場所として泉北ラボを利用しつつコーディネーターとしても活動していた。

C氏:泉北ラボでレンタルスペースとして不登校の子供たちの居場所づくりを行う。泉北ラボ側がレンタルスペースの利用料を通常よりも下げる代わりに、コーディネーターとしても泉北ラボに関わった。

D氏:泉北ラボに来る前に市民100人ミュージカルとして憲法ミュージカルを実施しており、その集客の際に地域で活動していた宝楽氏にお世話になった。泉北ラボ開設後に、当時新たに始めていた里山の団体について相談するために泉北ラボを訪れたところ、泉北ラボが人員不足だと知り、集客時の恩返しと、関わっていく中で分かった泉北ラボという施設が地域にとって大事だなという気持ちから乗組員として働くことに決めた。

E氏:自分のやりたいこととして飲食店の開業を目指す中で、自分の店を持つために地元のマルシェに目をつけた。そのマルシェがつながるDaysで、出店者としても当日事務局としてもつながるDaysに関わる中で、宝楽氏とつながった。その時に宝楽氏の目指す方向を理解し、いろんな人が訪れる場所でカフェを開きたいという自分がやりたいことと一致していることがわかっていたため、泉北ラボ開設時にシェアキッチンでカフェをすることに決めた。

F氏:現在の専門である障がい分野での活動で、保護者に向けた支援活動をしなければならないという決まりがあるため、泉北ラボで子育て子育て相談会を実施。レンタルスペース料金を無料にする代わりにコーディネーターとしても活動している。特定分野の相談窓口のように個別スペースで特定の人のみが訪れる相談所ではなく、オープンスペースで多様なお困りごとを拾うことができる泉北ラボに面白さを感じ、相談会実施場所に選んだ。

G氏:料理で自己表現をすることに楽しさを感じ、自分のお店をつくりたいと思ったが、地

域でお店を開くにはコミュニティを作らなければならないと考えていて、コミュニティについて学ぶために活動する中で、NPO 法人 SEIN 代表理事の湯川氏とつながりが生まれ、宝楽氏ともつながりが生まれる。泉北ラボが開設する際に、勉強の意味でコーディネーター会議に参加。

H 氏:宝楽氏が講師を務めるいずみ市民大学に参加し宝楽氏とつながる。まちのプレイヤーとして、自身が活動するまち歩き団体の記録冊子を泉北ラボに設置して仲間を増やしたり、レンタルスペースで活動団体のイベントを実施するなどプレイヤーとして泉北ラボに関わっている。

以上のことから、コーディネーターの方々は、単に泉北ラボに貢献したいというよりは自分の明確な目的があって、活動場所を必要としていたり、勉強や成長のために泉北ラボに関わっており、泉北ラボ側とコーディネーター側がお互いに利益を得ている状態になっていることが分かる。一方乗組員として働く D 氏は自身の目的達成よりも泉北ラボに貢献したい、泉北ラボが面白いと思って広げたいという思いの比重が高いことが分かる。このように、泉北ラボでコーディネーターが活動すること自体がコーディネーターというある意味泉北ラボの利用者が持つ力ややりたいという気持ちを引き出しながら、共に場を作っているということになっていると考えられる。

第2節 インタビュー調査から分かるコーディネーターの重要性

インタビュー調査から、利用者が持つ力を引き出しながら、利用者と共に場を作り出すこと、また何かと何かをつなぐことの2点からコーディネーターが重要であるということを示す。

まず、利用者が持つ力を引き出しながら、利用者と共に泉北ラボを作り出して、その中でコーディネーターが重要な役割を果たしていることが分かる考えやエピソードについてまとめる。B 氏、C 氏、D 氏からは、利用者のやりたいや困りごとを聞き出し、支援を行った例についてお聞きすることができた。

B 氏:手伝ってもらって巻き込むことって大事。泉北ラボでは、色々な方が自分のやりたい

ことで輝いてもらって、それで成り立っているところがすごいと思う。例えば、コロナの時期に中学校の家庭科部が、調理実習ができなくなりなにかやりたいという話を持ってきてくれ、それをいったん受け止めて、コーディネーター会議で共有して話し合い、コロナ禍で行っていたおかずBOXというお弁当配達による見守り支援のおかずを詰める役をお願いし、関係性が発展した。

C氏:居場所をしていて、ある一人が久しぶりに号泣することがあった。その時に、この1日のために居場所をやっていたと感じた。日常があって、心地いい空間になっているからこそ、誰かが本当に悲しくて話を聞いてほしい時に支援を出すことが出来る。箱があって、継続性があって、時間の流れがあってこそ支援を少しずつ出すことが出来て、その中にコーディネーターがいる。

D氏:できるだけ人が考えたやりたいことを形にできるように、持って行けるようにしたいなと思っている。例えば、コミュニティフリッジの寄付品を持ってきてくれた人に、なんで持ってきて、これからどうしていきたくてやっているのかと考えてお話をする。あたりかはずれかは分からないけれど、その人にとって良い案が出せたらと話をしている。

B氏、D氏は誰かのやってみたい！を泉北ラボの活動の中からかわり方を提案して叶えるように動いている。D氏については、上記のコミュニティフリッジの寄付者の方と一緒にマーケットイベントに出店したり、泉北ラボをテーマに卒業論文を書きたいという学生を運営に巻き込んだりと誰かのやりたいやできるを捉えて利用者と共に泉北ラボを作り出している。C氏については、誰かの困ったを聞き出して、日常的に利用者を作り上げているからこそ支援ができたと言っていた。このように、だれかのやりたい！や困りごとを聞いて、個を理解し、共に泉北ラボという場を作り上げている。

A氏からは、利用者が持つ力を引き出し、他の場所での支援や活躍につなげていたことについてお聞きできた。

A氏:何かしたいなと思っている方には、特技などを聞いて、情報提供することが大事だと思った。やりたいけれどできないとか、やれる場所をしらないという人に対して、ちょっと背中を押す一言があるだけで、ここですますよと紹介することで、意外とじゃあここで何かやろうかなとなるが多かった。

泉北ラボで情報提供をすることで、他の活動先につながり、そこで場をともに作り出すということにまで広げられていることが分かる。

泉北ラボ開設時から営業日のほとんどを泉北ラボで過ごしている E 氏からは、関わっているコーディネーターに対してこのことを意識していた。

E 氏:入ったからにはコーディネーターに成長してほしいと考えていて、その人にあった成長がみられるように手助けしたい。人によって得意不得意はあるし、人を見て願います。しんどくなりそうなときは、その作業にどういう意味があるのか、どういう人が助かっているのか伝えるようにしている。

泉北ラボで活躍するコーディネーターが持つ力を引き出しながら、泉北ラボという場をともに作り出しており、コーディネーターが役割を果たすためのサポートを行っていることが分かった。

G 氏からは、外から見た泉北ラボのコーディネーターの在り方についてお聞きすることができた。

G 氏:なぜ泉北ラボに足が向いたのかというところを聞きながら、言葉を引き出していって、その人が泉北ラボや地域に関われるようにする。コーディネーターが持っている引き出しの中にある関わり次第で決まるのではないか。またその際、その人に参加したいと思ってもらうためには、泉北 BASE では、あなたのすべての活動の関りが子供たちの未来の選択や応援につながるという手口しかないが、泉北ラボは手口がいろいろあるのではないか²⁴。

G 氏のインタビューから、泉北ラボが特定の人の居場所として限定している場所ではな

²⁴ 泉北 BASE 「カフェと駄菓子屋さんとフリースクール」 [泉北 BASE | カフェと駄菓子屋さんとフリースクール | 光明池 | 堺市南区城山台](#) (2024 年 12 月 13 日閲覧)

く、関りしろがたくさんあるため、利用者と共に場をつくりだすこと、利用者をなにかにつなぐことについて幅が広く多様な人を巻き込むことができる可能性があることが分かった。

H氏からは、まちで活躍するプレイヤーの目線から、やりたいことに挑戦することについてお聞きした。

H氏:今はSNSもあるので、自分で情報を得てその人に連絡することが出来る時代。相手も何かしてくれるわけじゃないから、自分のやりたいことを伝えていくことも大事。

今は主にレンタルスペースとして、教室や講座の開催で利用者の挑戦したいことを叶えているが、関りしろの大きい泉北ラボで、このような挑戦したいと思っている方の想いを叶えたり、もっと情報を得られる場所として捉えられるようにしていく必要があるのではないかと感じた。

続いて、何かと何かをつないでコーディネーターが重要な役割を果たしていることが分かる考えやエピソードについてまとめる。

D氏とA氏からは、コーディネーターのつながりについて伺うことができた。

D氏:何か挑戦しようという人が集まったり、普段つながれない人とつながれるところがいい。挑戦しようっていう前向きな方だけでなく、しんどいことを相談したい方とも同じ場所、窓口でいられることがいい。

A氏:泉北ラボで、コミュニティナースという働き方があると教えていただき、私がやりたいことと近いかもしれないということで、現在泉北ラボの近隣施設でコミュニティナースとして働いている。ご縁を頂いて社会とつながることができた。

D氏の発言から、コーディネーター自体がたくさんの人とつながることが出来ることが分かる。これは、コーディネーター自身の幅を広げ、コーディネーターの引き出しを増やすことにつながり、増えた引き出しは利用者などを人や社会資源につなげることにつなが

ると考えられる。A氏は、泉北ラボで仕事とつながることが出来ており、コーディネーター自身も社会資源につながる可能性があることが分かった。

また、今回インタビューした方々にコーディネーターをするうえで意識していることや、コミュニケーションを取るうえで意識していることについて伺い、泉北ラボに関わった方やまちで活躍されている方のコミュニケーションの工夫についてお聞きすることが出来た。(インタビューまとめとして付録参照)例えば、聞く8割、話す2割を意識して聞くことに徹するだったり、なぜを意識して相手にも気づきがあるようにしたり、自己開示をして相手にも打ち明けてもらいやすくしたりなどである。これらのことから、まずコーディネーターとつながることで、様々な支援やつながりの可能性がある泉北ラボとつながることが出来ていると分かる。また、泉北ラボの建物自体にコミュニケーションが発生する仕掛けがたくさんあることが分かった。例えば、入り口がたくさんあることで、どこから入るか迷われている方と話すきっかけとしたり、人を介してしかお金のやりとりができないので会計ついでに話したりなどである。これらハード面の仕組みも活用して、コーディネーターという人を介することでつながりを作り出していることが分かった。

代表の宝楽氏からは、泉北ラボという場所と利用者をつなぐという点について意見をお聞きできた。

宝楽氏:利用者同士のコミュニケーションは発生しなくても、泉北ラボではコーディネーターを介して場を理解してもらうことができる。視察の方が来た時に、普通のカフェなら何だろうと去っていくところをコーディネーターに聞くことで当事者でなくても相手のストーリーを追体験できる。また、地域にわざわざ視察が来ることが分かるなどして、その人にとってあまり意味がないと思っていた地域を誇りに思えるなど、人を介するからこそ好奇心や人の心を温められる。また、同時多発的にいろんなことが起こる広場的な空間は、泉北ラボではコーディネーターが植栽を動かすことによって、目は合わせずにお互いが共存していることを感じられるような場所になるが、実際利害が対立している。しかし、コーディネーターが読書中の方に「今日はにぎやかですみませんね。」など声をかければ大概の人は大丈夫だと答えてくれるなど、コーディネーターが調和することができる。

宝楽氏のインタビューより、コーディネーターが話しかけて人とつながるその前段階的なイメージで泉北ラボという空間で気持ちよく過ごしてもらい、また来たいと思ってもらえるようにコーディネーターが空間を作り上げているということを知ることができた。また、これまでのことを踏まえて、このように泉北ラボという場を利用者をつなぎ、利用者とコーディネーターがつながり、さらに利用者同士や社会資源とつながるというように、つながりに大きな3つの段階があり、そのどの段階でもコーディネーターという人を介する必要があると、それに加えてつながりを促進するためにハード面でも工夫や仕掛けがされていると考えた。

B氏の発言からは、何かと何かをつなげたあとに、地域コミュニティを形成し、その先に考えられる効果について聞くことができた。

B氏:何かことが起こった時に、急にみんなでやりましょうよって言われても普段バラバラだったら共助なんてできない。泉北ラボであった人ですよねとなるかならないかで全然違って、毎日防災訓練をするとなったらしんどいけれど、ラボが日常になじんでいって、ゆるやかに楽しみながら共助の関係性を作っているという意義がある。

泉北ラボでコーディネーターが入って泉北ラボに泉北ラボに関わる人たちに対して、なにかと何かをつなぐことで、地域コミュニティを形成し、いざというときに助け合える関係性をつくることができるといことが分かった。

ここまでを踏まえたうえで、障がい分野にて専門性を持ちながらコーディネーターとして泉北ラボに関わっているF氏のインタビューから、コーディネーター会議の重要性についてあらためて理解することができる。

F氏:日常会話から訪れた人の悩みを拾いあげることができるけれど、その後は専門性が必要。現在コーディネーター会議は復活したばかりで、まだまだ拡大していく必要がある。

誰かのやってみたい！をつなぐことも多いコーディネーターだが、一方で利用者の深刻

な困りごとなどに直面することもある。その際、分野の専門家のかたとコーディネーターが定期的に話し合う機会であるコーディネーター会議にて支援を話し合うことで、困りごとを抱えている人たちにとって様々な支援につながる事が出来るし、適切な支援へつながることの近道になると考えられる。

このように、筆者以外の視点からコーディネーターの重要性について示すことができた。利用者の困りごとや得意なことから泉北ラボという場をともに作り出すことができおり、コーディネーターがこれを達成するために泉北ラボに常時いる E 氏がサポートしてコーディネーターが力を発揮できる環境が整っている。また、プレイヤーが泉北ラボという居場所に自己実現の期待を感じていることが分かり、他施設でのコーディネーターからは泉北ラボの関りしろの広さについて気づかせてもらった。また、つながりに関しては、言葉でのコミュニケーションがなくても空間にともにいることでつながること、コーディネーターと利用者がつながること、利用者同士や利用者和社会資源がつながることとつながりに段階があり、コミュニティ形成に貢献していることが分かった。またつないだその先に、災害時に共助ができる関係性を普段から作っているということにもつながっているという考えも聞くことができた。

第3節 インタビュー調査から分かるコーディネーター継続の課題

最後に、泉北ラボコーディネーターの課題について、インタビューで浮かび上がったことを示す。元コーディネーターと代表から同じ内容の課題についてそれぞれの視点から伺うことが出来た。代表の宝楽氏、また Yycafe 店主の E 氏は以下のように述べている。

宝楽氏：基本何かをやりたくて、できる人をコーディネーターと呼んでいる中で、泉北ラボにいと日常生活を送っているときよりも関係人口が3,4倍、人によっては10倍くらい増えて入ってくる情報量がかなり増えるので、何かしたいと思っているから火がついてすぐに卒業してしまう。

E 氏：コーディネーターは卒業してしまうと学んだ。泉北ラボで成長することができて、たくさんの出会いがあるため次の活躍の場へ移っていく。

一方、元コーディネーターの B 氏と C 氏は以下のように語る。

B氏：コーディネーターとして泉北ラボに継続して関わる際にはお金と時間の問題がある。地域に貢献したいという思いはあるが、子育てなどでお金が入用な中、稼げる世代の巻き込みが難しいと感じる。現在自分もコーディネーターに戻りたいと思っているが、今している仕事はスケジュールが急に動くこともあるため、急に泉北ラボを休むことが予想され、仕事のなきっちり感がある泉北ラボのコーディネーターは気軽に戻ることができない。

C氏：コミュニティフリッジの利用者はお世話になった分貢献したいという思いがある人も多いが、小さいお子さんがいて時間に制限がある方や、心のケアが必要な方も多い。なかなか受益者が支援の方に移るのは難しい。

実際、B氏もC氏も泉北ラボで成長し、ここでの活動からさらに発展するためにコーディネーターを卒業された。A氏も、コーディネーターを通して成長し、現在は代表の宝楽氏の紹介で、コーディネーター業務をより発展させたコミュニティナースという仕事に近隣で就いている。泉北ラボのコーディネーターは成長することができ、いろんな出会いやたくさんの情報が入ることにより自分の実現したい方向性を考えてつなげていくことができる場である一方、泉北ラボ自体の人員が安定しないことが課題であることが分かった。また、チャレンジを応援する場として卒業を前提にたくさんの方を巻き込もうと思っても、コーディネーターがボランティアの仕組みということもあり、時間やお金の関係からハードルが高くなっていることが課題だと分かった。

このように、泉北ラボに関わる方は、まちづくりや居場所作り、NPO法人や団体の立ち上げなど何かしらやりたいこと、実現したいことを持っていることが分かる。さらに、元コーディネーターの方のAさん、Bさんは実現したい活動を泉北ラボでチャレンジしてみ、情報が集まる泉北ラボにて過ごす中で、より自分の求める方向性へ行くために卒業している。Cさんも活動が泉北ラボで手狭になり、さらなる発展のために卒業している。これらのことから、泉北ラボはだれかのやってみたい！を叶える場所というコンセプトがあるが、コーディネーター自身もやってみたい！を実現できる役割であることが分かるとともに、ある意味多目的にいろいろな方が集まる場所であって何にも染まらないフラットな場所であるからこそ、いろんな可能性に出会い、新たな出会いがあることで、より自分

のやりたいを実現する成長して方向性を決める場ともなっているのではないかと考える。

第4章 アンケートから見る泉北ラボのコーディネーター

第1節 アンケート調査概要

本稿で用いるデータは泉北ラボの利用者を対象に行った「卒業論文に関するアンケート」(以下、「アンケート」と記す)から得られたものである。アンケートの回答者は80名であった。この80名の回答をもとに今回の調査を行う。アンケートは、2024年11月28日から12月12日の間に泉北ラボにて筆者自身が利用者に紙で配布し回答してもらった。アンケートの設問は全部で16問設け、中には自由記述で回答してもらおう設問も用意した。今回の調査では回答者の居住地域やリピートして利用する理由などを知ることも目的としているため、学食の一つとして必然的に繰り返し利用する大阪健康福祉短期大学の学生は調査対象から除いた。

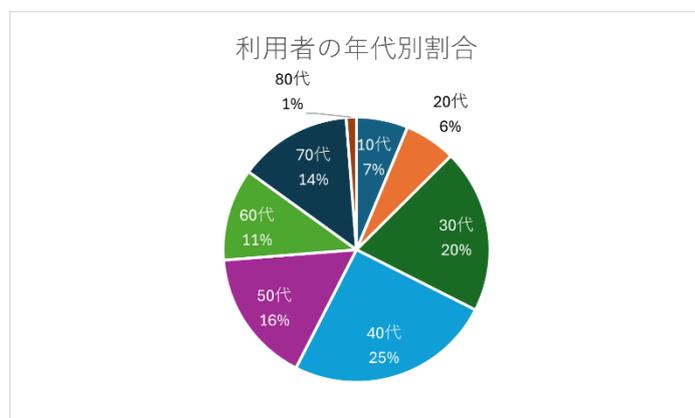
アンケートにてコーディネーターの存在は、一般的にわかりやすくするため「スタッフ」と表記している。ここでの「スタッフ」とは、カフェスタッフ以外のコーディネーター、乗組員のことを指す。

第2節 調査結果

アンケートによって得られた結果を項目ごとに説明する。

①年齢

表3 利用者の年代別割合

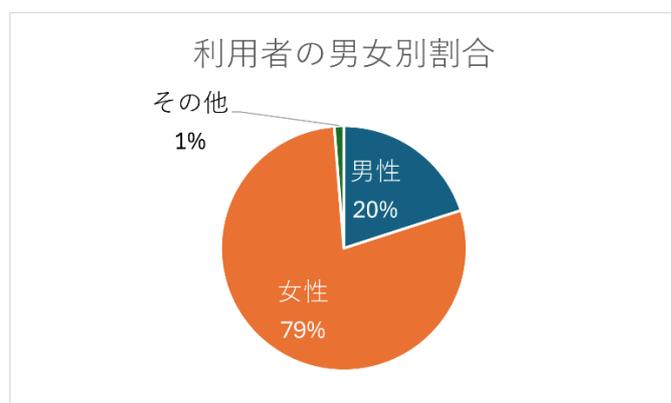


出所 アンケートより筆者作成

全体的に大きな偏りは現れなかったが、比較的 30 代、40 代が多い結果となった。10 代、20 代はそれぞれ 5 人ずつで、50 代、60 代、70 代が 10 名程度なのに対して少ない結果となった。

②性別

表 4 利用者の男女別割合



出所 アンケートより筆者作成

男性が 16 人に対して女性は 63 名と女性の方が多い結果となった。78.7%が女性の利用者となる。

③居住地からの最寄り駅

表 5 居住地の最寄り駅

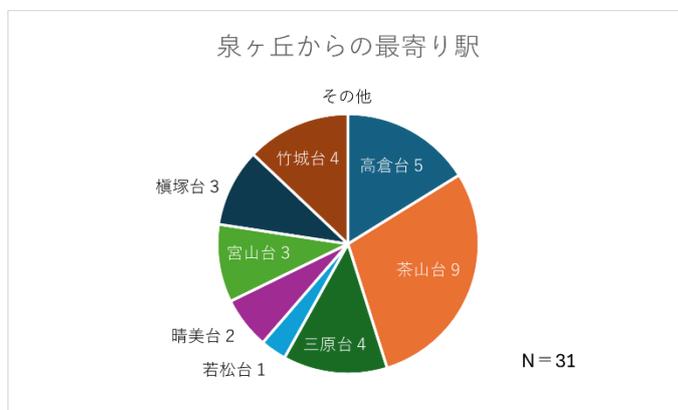
最寄り駅	泉ヶ丘までの所要時間	人数	最寄り駅	泉ヶ丘までの所要時間	人数
泉ヶ丘駅	0分	33	光明池駅	5分	6
深井駅	3分	6	和泉中央駅	8分	3
梅・美木多駅	3分	13	その他	—	19

出所 アンケートより筆者作成

泉北ラボの最寄り駅である泉ヶ丘駅が 33 人と最も多い結果となった。次いで泉ヶ丘駅の隣にある榎・美木多駅が 13 人と、近隣からの利用が多いことが分かる。その他には、出来島駅、藤井寺駅、平野駅、浜寺公園駅、金剛駅、久宝寺駅、岸和田駅、堺市駅、鳳駅、初芝駅、塚口駅、狭山駅、笠田駅、林間田園都市駅の回答があった。近隣と南大阪、和歌山の方を中心に利用され、大阪市内の方もいるといった結果になった。

④泉ヶ丘が最寄りの方の居住地域

表 6 最寄り駅が泉ヶ丘の方の居住地域

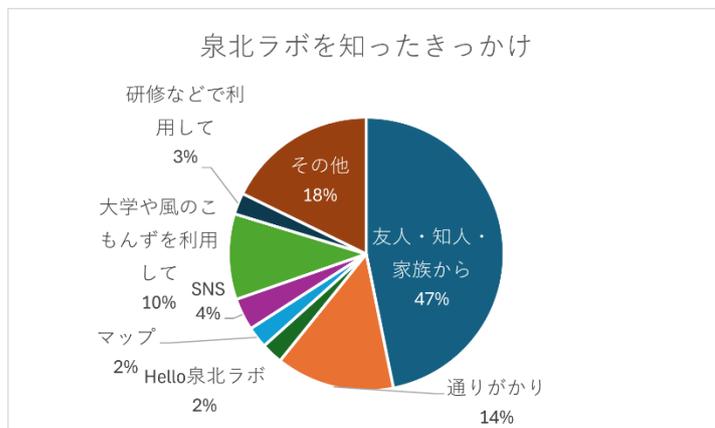


出所 アンケートより筆者作成

茶山台が 9 人、高倉台が 5 人と泉北ラボに一番近い地域からの利用者が最も多い結果となった。

⑤泉北ラボを知ったきっかけ

表7 泉北ラボを知ったきっかけ



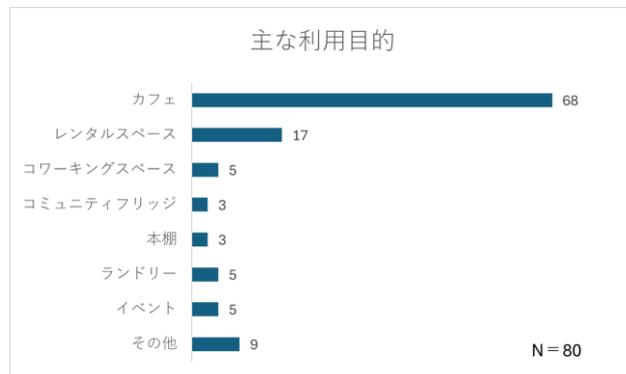
出所 アンケートより筆者作成

図7 泉北ラボを知ったきっかけ

友人・知人・家族からが37人で最も多い結果となった。もうすぐ3周年を迎える中で利用者が友人や家族に紹介することで少しずつ利用の輪が広がっていることが分かる。通りがかりが11人、Hello 泉北ラボが2人と近隣の方が気になってきてくれることも多い。また、大学や風のこもんずを利用して、同じ敷地内にあるから知ったという方も8人と多い。大学からは特別授業の講師で訪れたり、求人に来た企業の方が利用したりされることが多い。風のこもんずからは、高齢の方が風のこもんずの方で昼食を取った後にゆっくりお茶しに来られる方が多い。その他には、レンタルスペースでのお教室やイベントの会場だったため知ったという方が多かった。

⑥泉北ラボの利用目的

表 8 泉北ラボの主な利用目的

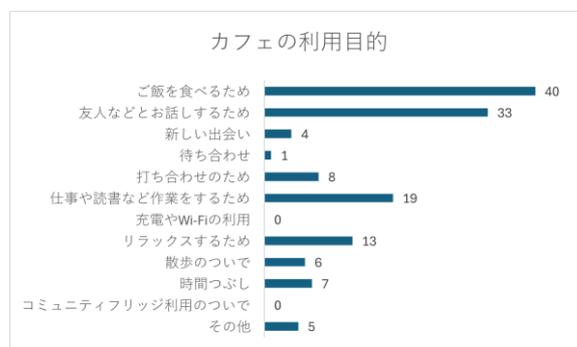


出所 アンケートより筆者作成

カフェが 68 名とカフェ利用が最も多かった。これは集計期間中にコワーキング利用の方が 1 人であったことと、回答者が主に回答する時間に余裕があるカフェ利用の方中心になったことも影響していると考えられる。コワーキングスペース、ランドリーが 5 名、本棚、コミュニティフリッジが 3 名と複数の機能を使いこなしている方もいた。レンタルスペースが 17 名、イベントが 5 名と、カフェを利用しながら講座や教室、イベントに参加できる点が現れている。

⑦カフェを選んだ方のカフェの利用目的

表 9 カフェの利用目的

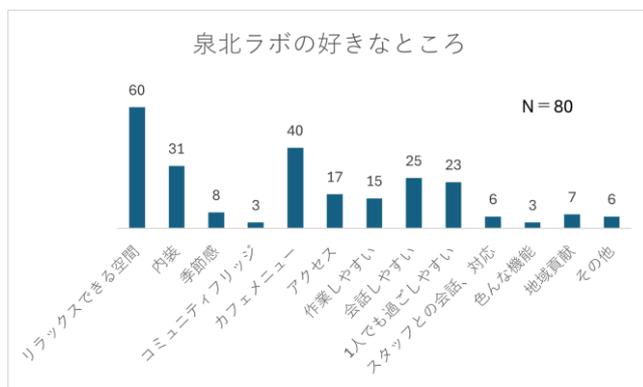


出所 アンケートより筆者作成

ご飯を食べるための40人、友人などとお話するための33名と、食事の他にも友人などとゆっくりするために利用している人が多いことが分かる。また、仕事や読書が19名、打ち合わせが8名と作業や仕事为目的で訪れている方も多い。長時間過ごせることと、Wi-Fiや電源が使用できることから環境が整っているためだと考えられる。リラックスするためにも13人となっており、多目的で集まる人が多い中、過ごしやすい環境づくりができていていると考えられる。

⑧泉北ラボの好きなところ

表 10 泉北ラボの好きなところ

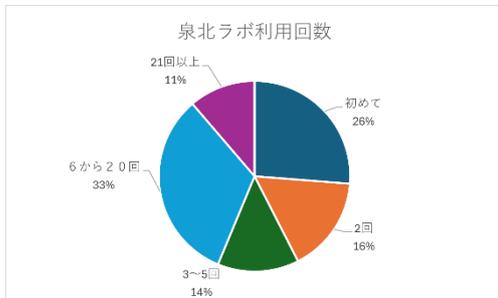


出所 アンケートより筆者作成

リラックスできる空間の回答が60人と最も多くなった。続いて内装が31人と建物と空間に対する回答が多かった。カフェメニューが40人とカフェのおいしさも泉北ラボを好きになる理由に大きな影響を持っていることが分かる。また、一人でも過ごしやすいと回答した方は23人、会話しやすいと回答した方は25人、作業しやすいと回答した方は15人と、一人での過ごしやすさと友人などと会話しやすいという点が共存している点が面白い。

⑨利用回数

表 11 泉北ラボの利用回数

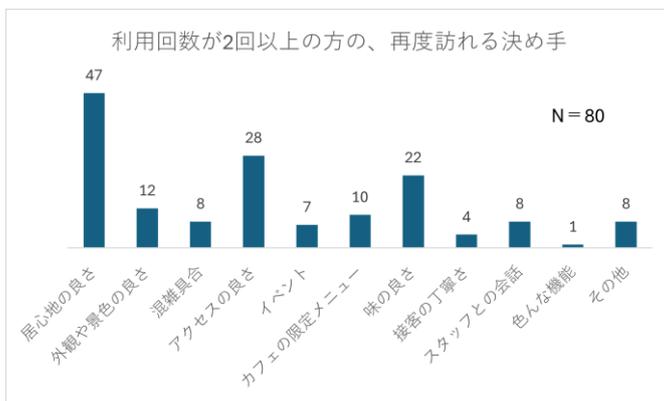


出所 アンケートより筆者作成

6 から 20 回が 26 人と最も多くなった。初めてが 21 人、2 回目も 13 人と利用を始めたばかりの方も多いが、21 回以上利用している方も 9 名で日常的に利用している方もいることが分かる。新規層とリピーター層が半々くらいである。

⑩利用回数が 2 回以上の方の、再度訪れる決め手

表 12 泉北ラボの利用回数が 2 回以上の方の、再度訪れる決め手



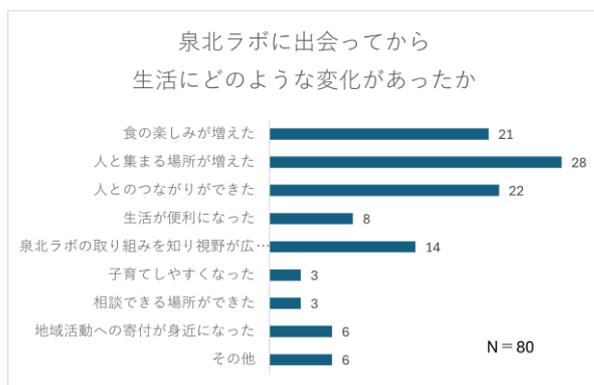
出所 アンケートより筆者作成

居心地のよさと回答した方が 47 人で最も多かった。続いてアクセスの良さが 28 人と、地域の方の利用が多いこと、駅から少し歩くが無料の駐車場があり車で来ることが多いことが再来に大きく影響していることが分かる。続いて、ライスメニューが月替わり、サン

ドイツが日替わりであるカフェの限定メニューが 10 人、味の良さが 22 人とカフェ自体が再来の大きな理由になっていることが分かる。スタッフとの会話は 8 人と多くはない結果となった。

⑪泉北ラボに出会ってから生活にどのような変化があったか

表 13 泉北ラボに出会ってから生活にどのような変化があったか

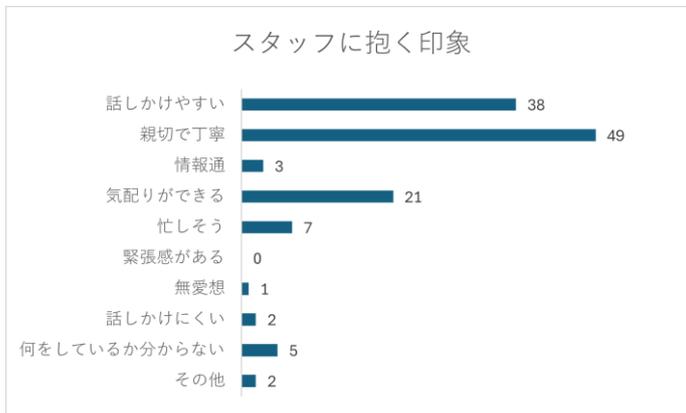


出所 アンケートより筆者作成

人と集まる場所が増えたと回答した方が 28 人で最も多かった。続いて人とのつながりができたと回答した方が 22 人だった。この回答者はレンタルスペースの参加者の方が多く、レンタルスペースを受け入れることで、レンタルスペースでの教室やイベントで人とのつながりができることを促進しているとわかった。続いて食の楽しみが増えたと回答した方が 21 人で、カフェにより利用者の方に新たな楽しみを提供していることも分かる。また、泉北ラボの取り組みを知って視野が広がったと回答した方が 14 人で、コミュニティフリッジで寄付の身近さを知ったり、レンタルスペースでのイベントで新たな文化を知ったりと情報が集まる泉北ラボに来ることで視野が広がったと感じている方もいると分かる。

⑫ スタッフに抱いている印象

表 14 スタッフに抱く印象

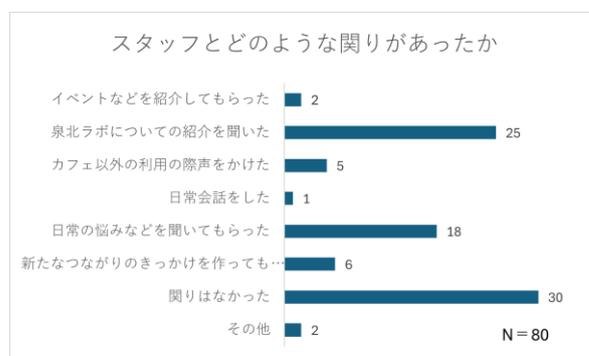


出所 アンケートより筆者作成

親切で丁寧が49人、話しかけやすいが38人、気配りができるが21人とおおむね好印象を抱いている人が多いことが分かる。また、忙しそうが7人、話しかけにくいと声をかけづらい雰囲気を感じている方もいた。何をしているか分からないといった方も5人で、パソコンに向かって作業をする見えなさや、コミュニティフリッジの登録といった泉北ラボならではの作業があること、そしてカフェ以外のスタッフというコーディネーターの立場が特殊であることから、そういった意見があるのではないかと推察される。また、情報通であると回答した方は3人で、イベントの紹介など、まだまだ地域の情報などをお伝えできているとは言えないことが分かる。

⑬ スタッフとどのようなかかわりがあったか

表 15 スタッフとどのような関りがあったか

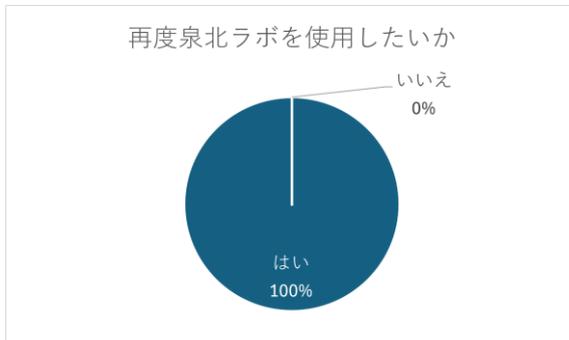


出所 アンケートより筆者作成

泉北ラボについての紹介を聞いたが30人と最も多くなった。Hello 泉北ラボを手渡したり、コミュニティフリッジについてチラシを配りながら紹介したりと紹介を切り口に会話を始めることが多いためだと考えられる。続いて多かったのが、関りはなかったという回答だった。回答者は25人で、この内9人は初めての利用だったが、他の利用者はリピーターだった。複数回利用しても日常会話や泉北ラボの紹介につながっていない方も多いことが分かる。日常会話をしたと回答した方は18人で、日常の悩みを相談したと回答した方は1人であった。まだまだコーディネーターの役割である日常会話から悩みを聞き出し解決するということにつなげきれていないのではないかと思う結果となった。新たなつながりのきっかけを作ってもらったと回答している方は5人おり、コーディネーターによって生まれたつながりがあることも分かる。

⑭泉北ラボにまた来たいと思うか

表 16 泉北ラボを再度利用したいかについての表



出所 アンケートより筆者作成

はいが 80 名で 100%となった。

⑮⑭の回答をした理由

表 17 泉北ラボにまた来たい理由

カテゴリー	回答
カフェ	<ul style="list-style-type: none"> ・ドリンクメニューがどれもとってもおいしい ・今日頂いた食事がとてもおいしかったので、また友人も誘い来たいです。 ・手ごろな値段でおいしい食事ができる、適度なぎやかさが心地いい
雰囲気	<ul style="list-style-type: none"> ・雰囲気が好きで落ち着きます。他の地域にもこんな場所が増えればうれしいです。 ・様々な目的の人がいるので、気兼ねなく入れる感じに居心地の良さを感じます ・明るく、自然を感じる場所なので、何度も来たいです。 ・ゆっくりと過ごせるフンイキがとても良いと思いました。
立地	<ul style="list-style-type: none"> ・近いしごはんも安くておいしいので。

つながり	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が居心地がいいと感じていて、また、泉北ラボに来ると新しい人とのかわりが増えるので、楽しいです。 ・ラボを通じて、劇的に人との出会い、つながりができた。他方で、myroomのような空間であり、目的を求められない、off でいられる人間関係がある(スタッフの方々との)。この空間をずっと持続させてほしい！
設備	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃがあり、子連れでもきやすい ・来たくないと思う理由はないし、暖炉が素敵です！
他の機能	<ul style="list-style-type: none"> ・次回来た際はコワーキングスペース利用がしたいと思ったから ・店内がかわいい。フードロスに協力
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・空間の雰囲気がいい。駐車場がある。スタッフが親切で話の切込みが面白い
リラックス	<ul style="list-style-type: none"> ・私のいやしの時間です♡
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・なんとなく来させていただくことがありそう！ ・気軽に立ち寄りそうです ・泉北の住宅地には、カフェやコワーキング機能がある施設があまりないので。

出所 アンケートより筆者作成

自由記述の回答は表のように大きく分類できた。各分類でいくつか回答を表に記載している。雰囲気の回答が28件、カフェに関する回答が17件、設備の回答が6件、つながりに対する回答が5件、他の機能に興味を持ったという回答が4件、リラックス、立地に関する回答が2件、レンタルスペース、スタッフに関する回答が1件、その他未分類の回答が9件だった。⑩の居心地の良さと同様雰囲気の良さがまた訪れようとする大きな理由になっている。その他には、なんとなく来させていただくことがありそうという言葉で表せないが気に入ったという回答や、泉北の住宅地にはない機能があるからなどの回答があった。通り抜けOK長居OKのwelcomeなところと泉北ラボのコンセプトを理解して回答してくれた人もいた。

⑩その他伝えたいこと

80名中15名が記入してくださった。「たくさんの方に利用してほしい」といった泉北ラボをもっと広めたいといった意見が複数あり、泉北ラボをしたきっかけで友人・知人・家族からが多かったように、気に入って誰かに伝えたいと感じる方が多くいることが分かる。また、「子連れでデザートまでゆっくり食べたりできるのはここだけなので、これからも利用します」といった、子育て世代が利用しやすい場所として活用している方もいた。一方、「子供を連れて来たいなと思います。少し騒がしくても大丈夫でしょうか、」といった子供を連れてくるのを心配している方もいた。時間帯によっては静かで落ち着いた空間が広がっているためだと考えられる。

第3節 アンケート調査から見る泉北ラボのコーディネーター

アンケート調査から、利用者視点の泉北ラボのコーディネーターについて明らかにすることができた。

利用者にとっては、泉北ラボは友人などと集まり食事やお茶をするカフェとして捉えている方が多いことが分かった。また、コーディネーターについて、関りがなかったという回答も多く、コーディネーターの存在自体があまり浸透しておらず、またかわりがあった方でも泉北ラボの説明を聞いた程度である人が多いことがわかった。このことから、泉北ラボを訪れる人は、コーディネーターを気軽に相談できる相手として認識しているわけではなく、カフェ以外の作業をしているスタッフがいるなという程度の認識であることが分かった。

重要性の1点目、利用者が持つ力を引き出しながら、利用者と共に場を作り出すことについては、利用者視点から見ると個として理解し受け入れられていると感じたり、個性を活かして参加する場所として捉えられているとは言えない結果にであった。コミュニティフリッジの利用相談や、新規レンタルスペース登録の相談など、明確に相談という目的をもって泉北ラボを利用してくださる方以外には、まだまだ相談できる環境づくりやチャレンジを応援する環境づくりをしていく必要があることが分かる。しかし、アンケートより居心地の良さ、明るさや薪ストーブの醸し出す雰囲気など建物自体が持つ力の大きさなど、泉北ラボのハード面での強みが分かる結果となった。また、カフェのおいしさからも泉北ラボがまた来たいという空間を形成していると分かる。困りごとを相談したり、気軽

にやってみたいが実現できたりという捉え方をされていない一方、これらハード面とカフェ機能の強みから困っている人が勝手にアウトリーチしてくれる環境が整っていると考えられる。

2点目の、何かと何かをつなぐことに関しては、特にレンタルスペース利用者がつながったと感じていることが分かった。レンタルスペースの利用者は、まず泉北ラボで様々な教室やイベントが開催されることで趣味自体が見つかったと回答している人がいた。また、同じ教室やイベントに参加する人と交流することで、新たな出会いがあり、同じ趣味を持つ仲間とつながっていることが分かった。レンタルスペースの広報や主催者との関係づくりでコーディネーターが新たなレンタルスペース利用者を増やす、そして継続的にレンタルスペースを使用してもらうとともに泉北ラボ利用者に参加をお勧めするなどの取り組みを行うことで、地域に新たなつながりを作り出すことに貢献していることが分かる。

アンケートから分かる課題については、相談できる関係性を作っていくことの難しさである。スタッフの印象については、親切で丁寧など話しかけやすい好印象が多いが、スタッフとの関りは泉北ラボの紹介を聞いたでとどまっている、または複数回利用の方でもスタッフとの関りはなかったと感じている方が多く、日常会話で何気ないことを話したり、悩みを相談できる人とは捉えられていないことが分かる。コーディネーターが常に存在している、また複数のコーディネーターで完全に情報を共有できる状況ではないため、利用者との関係を積み上げていくことが難しく、利用者にとって個を受け入れられたという状態に至るまでに遠回りしてしまっていると考えられる。

第5章 地域交流拠点におけるコーディネーターの重要性と課題

第1節 現在、過去、利用者視点からみるコーディネーターの重要性

参与観察、泉北ラボ関係者のインタビュー、泉北ラボ利用者のアンケートから、泉北ラボにおけるコーディネーターの重要性について明らかになった。

まず、個を受け入れ、利用者が持つ力を引き出して利用者と共に場を作り出す点についてまとめる。参与観察では、レンタルスペースとコミュニティフリッジを周知するためのマーケットイベント出店時にとくに重要性が示された。インタビューからは、利用者の得意ややりたいを引き出して、泉北ラボで取り組めることの中からその人に合った関りを提案してともに泉北ラボを作ることで、泉北ラボ内外での小さなコミュニティづくりに貢献していることが分かった。また、他の施設から見た泉北ラボの関りしろの広さという可能性についても浮かび上がった。多様な人が泉北ラボを訪れ、それらの人たちの悩みや挑戦したい気持ちをコーディネーターが引き出し、共に場を作っていくことで、小さなコミュニティ作りに貢献し、社会的孤立の解決や地域のコミュニティ形成につなげていけると考えられる。

次に、何かと何かをつなぐ点についてまとめる。参与観察では、社会的資源との接続はコーディネーター会議が大きな役割を果たしていること、人と人のつながりについては、コーディネーターとして活動する中で個として利用者を理解し、日常会話で引き出しの中からつなげ先を考えていることが分かった。インタビューからは、つなぐということに3つの段階があるとわかった。1つ目は、空間で時間を共有することにより、言葉を用いずにその場とつながること、2つ目は、コーディネーターとつながること、3つ目は、利用者同士や社会資源とつながることである。泉北ラボにかかわりのある人たちがコミュニケーションをとるうえで意識していることからコーディネーターとつながるために、ハード面での仕掛けとコーディネーターの意識があることが分かった。また専門家目線から、最終段階の社会資源との接続の際に専門家の視点が必要で、コーディネーター会議が大きな役割を果たしていることが分かった。アンケートからは、レンタルスペースの利用者が趣味や仲間とのつながりができたと感じていることが分かった。

アンケートからは、コーディネーターの存在が浸透しておらず、困りごとを相談したり、何か挑戦したいことが明確にあったりする方以外の悩みの拾い出しや挑戦の場の提供

はまだまだできていないことが分かった一方、建物自体が出す雰囲気やYycafeのおいしさなどコーディネーター以外で何度も来たくなる空間が形成されており、困りごとを抱えた人が勝手にアウトリーチしてくれる環境にあるという点を見いだせた。なお、空間が持つ力については、インタビューにて泉北ラボの好きなおところについて多くの方がハード面についても答えていたり、筆者が利用者と日常会話をする中で聞き出せた泉北ラボに好感を持っている点についてハード面を良く挙げてくださるのを聞いたりしていることから、泉北ラボに人が集まる大きな要素であることが分かる。

第2節 コーディネーターについての課題

筆者の参与観察、泉北ラボに関りがある方へのインタビュー、利用者へのアンケートから、コーディネーターについての課題が主に3点浮かび上がった。

1点目は、利用者の悩みや得意なことを聞き出すテクニックの言語化が難しいことである。コーディネーター自身の性格や経験によってその人に合ったコミュニケーションの仕方があったり、言葉にできない間の取り方や相手の心の機微のとらえ方があるため、利用者とのコミュニケーションはマニュアル化することが難しい。泉北ラボでコーディネーターをしていく中で少しずつでもコミュニケーションの取り方は学んでいくことができるが、それぞれのコーディネーターが泉北ラボで学んだコミュニケーションの取り方が継承されないのは、筆者は惜しいと感じた。インタビューでは、今までコーディネーターの方が泉北ラボで行っていたコミュニケーションの取り方について意識していたことを直接お聞きすることができて、皆さんがしっかり自分なりの方法にたどり着いていることが分かったとともに、筆者自身学ぶことも多かった。コーディネーターにとって大事な課題などを拾うコミュニケーションについて、今までの学びが継承され、これまでの学びを活かしてさらに発展させること、さらにたくさんの方のやりたいや困りごとを拾えるようにすることが課題だと考えた。

2点目は、共有と継続が必要な中でシステムが構築されていないことである。インタビューにて宝楽氏が信頼は回数だと述べているように、利用者にとって、違った方でもコーディネーターと毎回何かしら話すことは泉北ラボに信頼を感じることに繋がると考えられる。しかし、個を認められていると感じて、実際に悩みを打ち明けたりやりたいという思いを話してくれる関係性になるには、毎回初めましての状態でもコーディネーターと話す

より、数回訪れることで個として認識されたと感じる必要があると考える。実際、アンケートでは6回以上訪れている方でも5回以下の方でも、スタッフとの会話が再来のきっかけとなっている人や、スタッフに悩みを相談したと回答している方の割合は大きく変わらなかった。利用者が悩みを打ち明けてくれる関係性まで持って行くための、コーディネーター間の情報共有に限界があることが課題だと考える。

3点目は、コーディネーターの人員不足についてである。インタビューから、泉北ラボで過ごす中でコーディネーター自身の関係人口が増加し、多くの情報が集まる中で新たに進みたい方向や自身の活動をさらに発展できる場所を見つけ、コーディネーターは卒業してしまいラボ自体の人員不足が発生することが分かった。また、元コーディネーターの目線から、時間とお金に限りがある中、30代、40代の子育てをされていて働くことのできる世代は、子供の受験などお金が必要なタイミングがあるためコーディネーターを続けることが難しいという意見を聞くことができた。現在、レンタルスペースとしての泉北ラボの使用が増えていることから、やりたいという想いがある方を泉北ラボにどんどん巻き込んでいく仕組みを作ったり、好きな時にフラットお手伝いができる形を模索したりと、コーディネーターとして継続的に確保することが課題となる。カフェのE氏や、泉北財団の乗組員などもコーディネーターとして動くことが出来るため、コーディネーターがいない状態でも泉北ラボは成り立つが、常時誰かがコーディネーター的な立ち位置として動くことは難しくなるため、第1節でコーディネーターの重要性が示されたことから純粋なコーディネーターを継続的に確保していくことが社会的孤立を解決し、地域コミュニティを形成することに大きな意味を持つと考える。

終わりに

泉北ラボにて、利用者の力を引き出して利用者と共に場を作り出す点、何かと何かをつなぐ点でコーディネーターの存在が重要であることが分かった。これらをコーディネーターが取り組むことで、個人や地域の課題を解決し、地域のコミュニティを作ることにつながる。

インタビューにて泉北ラボは多機能で、カフェという利用ハードルの低さから多様な人の入り口となっているという特徴が浮かび上がった。一方、泉北BASEのように子供や不登校の生徒など特定の人をターゲットとした居場所の形もあることが分かった。上記の重要性は、このような特定のターゲットの課題解決を目的とした居場所にも当てはまると考える。

両者の違いは関りしろの広さの違いだと考えるが、泉北ラボの広さは、逆に特定のことに取り組みたいという熱意がある人にはひっかかりにくい可能性もある。子供についての何かやりたい思いがあれば、活動場所を選ぶ際に泉北 BASE などは引っかけやすいかもしれない。このように、それぞれの居場所にそれぞれの良さがある中で、どの居場所においても上記の重要性を意識して社会的孤立の解決や地域コミュニティの形成に動いていく必要があると考えた。

まさに泉北ラボのような気軽に利用することができて、コミュニティが生まれるコミュニティカフェや、特定のテーマに沿って建てられた居場所など、地域の人にとっても多数の選択肢から選べるくらい居場所が増えることで、地域が様々なことで協力し合える場所に変化し、誰もが安心して暮らせる街が広まっていくことを願う。

謝辞

本論文の作成にあたり、大阪公立大学商学部公共経営学科 松永桂子教授には、指導教員として終始熱心なご指導を頂きました。心から感謝いたします。加えて、ご多忙にもかかわらず、快く調査にご協力いただいた公益財団法人泉北まちと暮らしを考える財団代表の宝楽陸寛氏、乗組員の穂積亜由氏、Yy カフェの山中勇也氏に感謝いたします。また、ヒアリング調査にご協力いただいた大内郁美氏、川辺響子氏、野本美貴氏、高田美奈子氏、鈴木有美氏、坂本慎介氏は、お忙しい中お時間をくださり誠にありがとうございました。大変貴重なご意見を賜りましたこと、深く感謝いたします。アンケート調査にご協力いただきました泉北ラボ利用者の方々にも、深く感謝を申し上げます。

参考文献

- 内田治(2022)『アンケート調査の計画と解析』株式会社日科技連出版社
倉持香苗(2014)『コミュニティカフェと地域社会—支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践』株式会社明石書店
田中元子(2022)『1階革命 私設公民館「喫茶ランドリー」とまちづくり』株式会社晶文

社

田中康裕(2019)『まちの居場所、私設ではなく。—どうつくられ、運営、継承されるか』

株式会社水曜社

田中康裕(2021)『わたしの居場所、このまちの。制度の外側と内側からみる第三の居場

所』株式会社水曜社

寺崎新一郎(2022)『インタビュー調査法の基礎 ロングインタビューの理論と実践』株式

会社千倉書房

宝楽陸寛(2023)「まちの家事室「泉北ラボ」を起点にコロナ禍の「見えない孤立」に挑

む、自走型自治モデル報告 2021-2023」サロン文化舎

「泉北ラボ配布資料」

参考資料

泉ヶ丘広場専門店街「つながる daysTOP」[つながる days TOP | 泉ヶ丘ひろば専門店街](#)

[【公式】](#) (2024年12月13日閲覧)

Excelの森「[【エクセル初心者向け】アンケート結果を集計する簡単な方法を紹介。複数回](#)

[答でも対応可能】【エクセル初心者向け】アンケート結果を集計する簡単な方法を紹介。](#)

[複数回答でも対応可能 | Excelの森](#)(2024年12月13日閲覧)

大阪府住宅供給公社 団地再生プロジェクト「響き合うダンチ・ライフ」[茶山台ほけんし](#)

[つ | 響きあうダンチ・ライフ | 大阪府住宅供給公社 | 団地イノベーショングループ](#)(2024

年12月13日閲覧)

泉北のまちと暮らしを考える財団「泉北ラボプロジェクト詳細」[泉北ラボプロジェクト詳](#)

[細 | 泉北のまちと暮らしを考える財団](#)(2024年12月13日閲覧)

泉北 BASE「カフェと駄菓子屋さんとフリースクール」[泉北 BASE | カフェと駄菓子屋さ](#)

[んとフリースクール | 光明池 | 堺市南区城山台](#)(2024年12月13日閲覧)

卒業論文に関するアンケート

大阪市立大学商学部公共経営学科 4年

松永ゼミ

川西百穂

この度はアンケートにご協力いただきありがとうございます。本調査は、「まちの家事室」である泉北ラボが続いていく理由についての研究を目的として行われる調査です。得られた調査結果は慎重に保管し、個人が特定されないように配慮いたします。

○年齢を教えてください。

10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代～

○性別

男性 女性 回答しない

○居住地の最寄り駅を教えてください。

泉ヶ丘駅 榊・美木多駅 光明池駅 和泉中央駅 その他() 駅)

○泉ヶ丘が最寄り駅の方は、居住地域を教えてください

高倉台 茶山台 三原台 若松台 晴美台 宮山台 榎塚台
竹城台 その他()

○泉北ラボを知ったきっかけを教えてください。

友人・知人・家族から 通りがかり Hello 泉北ラボ(フリーペーパー)
マップ SNS 大学や風のこもんずを利用して 研修などで利用して
その他()

○泉北ラボの主な利用目的を教えてください。(複数選択可)

カフェ レンタルスペース コワーキングスペース コミュニティフリッジ

本棚 ランドリー イベント その他()

○上の質問でカフェを選んだ方にお聞きします。カフェの利用目的は何ですか。

ご飯を食べるため 友人などとお話するため
仕事や読書など作業をするため 新しい出会い 散歩のついで
充電やWi-Fiの利用 時間つぶし 待ち合わせ 打ち合わせのため
リラックスするため フリッジのついで その他()

→裏に続きます。

○泉北ラボの好きなところを教えてください。(複数選択可)

内装 外観 軒下 薪ストーブ カフェ 本棚 店内の雰囲気
ランドリー イベント スタッフ その他()

○泉北ラボの利用回数を教えてください。

初めて 2回 3~5回 6~20回 21回以上

○利用回数が2回以上の方にお伺いします。再度訪れる決め手となったのは何ですか(複数選択可)

居心地の良さ アクセスの良さ カフェの限定メニュー 味の良さ
イベント 接客の丁寧さ スタッフとの会話 外観や景色の良さ
混雑具合 色んな機能 その他()

○泉北ラボに出会ってから生活にどのような変化がありましたか。(複数選択可)

人と集まる場所ができた 食の楽しみが増えた 人とのつながりができた
生活が便利になった泉北ラボの取り組みを知り視野が広がった
子育てしやすくなった 地域活動への寄付が身近になった

○スタッフにどのような印象を抱いていますか。(複数選択可)

話しかけやすい 親切で丁寧 情報通 気配りができる 忙しそう

緊張感がある 無愛想 話しかけにくい 何をしているか分からない
その他()

○スタッフとどのような関りがありましたか(複数選択可)

イベントなどを紹介してもらった 泉北ラボについての紹介を聞いた
カフェ以外の機能を利用の際声をかけた 日常会話をした 日常の悩みなどを聞いてもらった
新たなつながりのきっかけを作ってもらった 関りはなかった その他
()

○泉北ラボにまた来たいと思いますか

はい いいえ

○差し支えなければ、上記の回答をした理由を教えてください。

()

○その他伝えたいことがあればお書きください。

()

ご協力ありがとうございました！！

付録② インタビュー記録

【コーディネーターの人柄】

A.看護師という強み

B.普段交わらない人が交わるところに喜びを感じる

そこらへんにいそうな人やのにいろいろやり散らかしている行動力
すごい人間が好き

C.地域に貢献したいという想いはある

お喋り好き、人と接するのが好き、好奇心旺盛、一応引っ張るタイプ
自然と情報が入ってくる。意識しているから取りに行っているのかも

D.いつも自分の幅を広げたくて生きている

過去の自分が困ったことがある人。ピンチになった時に引き上げてくれる人や助けてくれる人や場所があった時に、初めて自分も一人で生きてるんじゃないみたいな気持ちになる。そして自分も貢献したいという気持ちに回ることがあるのでは。弱い立場に立った方が考えが深くなって温かみもある。

自身も子供の時は変わっていて友達がいない時もあるって、大きくなって家事・出産がしんどかったりきょうだい児だったりでしんどかった。いろんな経験から自分も穂とを元気づけたいと思うようになった。

E.基本的に自分の目に見える範囲の人が幸せになってくれればいい。

G.活動的。余裕のあるうちにみんなとコミュニケーションをとっておこう

一個のことを継続してできない、多動すぎて。一つやっても100点取れないから忙しくて70点で許してもらってる状況を作っている

【泉北ラボの特徴】

A.話したい方、しゃべりたい方が多くいらっしやる。

いろんな人がいて、いろんな人がいるから相性もある

何時間居ても文句を言われなところが好き

時計がないことやトイレが分かりにくいことが、コミュニケーションツールになっている

Welcome だし、だれも拒まない、入りやすい。窓も開けていてどこからでも入れる

全体の雰囲気 genuinely 圧がない。話したかったら話せばいい。

コミュニティフリッジを利用しながら話したかったら話せる環境にある

B. ラボは日常。じわじわとなじんでいる。イベント以外の日もケア出来て、面白みがある
一歩踏み込むことは、あえてできなかつたりしなかつたりする。ゆるやかなケア。その人にコミットしすぎない。

ハードとソフトがマッチして出来上がっている場所。人もハード面も開かれている
自分のやりたいことで輝いてもらって、成り立っている

コミュニティフリッジ利用の方、今は支援を遠慮していてもラボとつながれる、選択肢がある

C. ビジネスをしっかりやっているところが新しい。

建物のデザインと無料駐車場が強み

泉北ラボはしっかりした拠点なので、きみの森の成長スピードが速まった

視察やカフェ利用の方に不登校をしってもらうきっかけになる

悩んでいる保護者にとって、カフェと空間がよりどころになる。思いでの場所に。

非営利活動は結果が数年後でもいい。ラボ(居場所)は種まきで、たった一日のために存在している。行政は数字を出す必要がある。福祉の心だけではつぶれてしまうので、経営の視点がある。お互いに良い方向に向かっていければいいな。

箱があって、継続性があって、生きている時間の流れがあって支援っていうのを少しずつ出せる。

山中さんの対応力が強み。経営感覚とコミュニティのバランスがすごい。心の機微を感じ取ることの優秀さ。

レンタルスペースが安価で借りられるところ、コミュニティフリッジがあるところ、デザイン

D. いろんな方がいろんな関りの形を持つ私設の公民館のような場所を作りたい

導線が考えられている建物。軒下があって気分転換に外に出られる。

何かを挑戦しようって人が集まったり、普段つながれない人とつながれるところ。前向きなだけでなく、しんどいことを相談したい人も同じ場所、窓口なの珍しい。

オープンな空間、おいしい café、駐車場、駅近で落ち着いていて過ごしやすい景観があり設計されている

E. 居場所事業の中で全世代がいてる状況はなかなかない。入り混じるのが泉北ラボの特別

なところで素敵

F:明るくて、余裕がある広さがあること。通り過ぎることが可能で、車いすも入ることが出来る

困っている人も挑戦したい人もコーディネーターがサポート出来て可能性が広いことにワクワクする

いろいろな人が留まることができて、長時間いることが可能。所属できる機能がたくさんあること

カフェである意味贅沢で、自分のためにお金と時間を使うことができる状態。泉北ラボはカフェに来る余裕がない人も来れるところが良い

カフェとして毎日顔が変わるのがめずらしい

G.人を目的としていける場であること。

コーディネーターを担う人がたくさんいられるところ(関りしろが大きいところ)が特徴
泉北ラボの利用者は、①いつも楽しそうなことをしているから、行ったらそのものや事柄と出会いがあるかとも思っている②イベントをやっているから参加したいと思ってくる③地域でコミュニティを作ってみたい人が視察とか偵察とかで来る、の大体3パターンではないか。こんなお店がうちのところにもあったらいいのと思わせる。

H:まちづくりの拠点としていい場所である。コミュニティーナーシングの場所でもある。宝楽.ランドスケープのプロに見てもらっている配置。門を開放してもらったことで人の流れができた

【コミュニケーションをとるうえで意識していること】

A.挨拶からして、雑談するうちに話せるように。

その人に興味を持つ。知りたいという気持ち。興味をもって集中して聞いていると、自分にとって引っかかることがある。

B.聞きが8割。しゃべってもらうのをこころがける

相手に対して興味をもって、なんでを聞くと本人にも気づきが起きる。

言葉をたくさん交わせばコミュニケーションじゃなくてお互いを承認しあう。

C.自然体。意識しすぎ、行き過ぎはだめ。素直に思ったことを伝える。

コーディネーターとして立つ私にマイナス要素があるとわかった瞬間向こうも話してくれる。自己開示。日々悩んでるけど開示して自分も喋って何か打ち解けられたねって場所に

ラボはなっている

とりあえずボールを投げる。キャッチしてくれるかは相手次第。しゃべらないのもコミュニケーション。その空間と一緒にいるということがコミュニケーション。

学校休み？と言われるのが一番つらいから、関係ないことを言ってあげる。

D.話しかけてもらえる雰囲気づくりや温かみ、あえてちょっと突っ込んだり話を聞いたりしている。ぐいぐい来ていると思われたらあかんねんけど、少し引っかかりを作りたいかなっていう風にバランスを取っている。

ポジティブな話を聞くと嬉しくなるし、しんどい状況にある人の話を聞くと視野が広がる。いつも自分の幅を広げたくて生きているから、こっちから判断せずにフラットに話すようにしている

E.軽い常連さんになってほしくて話しかけている。ここにいていいんだなって思ってもらうために話しかける。

理想は全員に話しかけたい。入ってきた人全員に何かしら声をかけたい。おいしいと言ってくれるのはうれしいけど、それだけでは満足しない。少し顔見知りが増えると面白い。一方で、深い関係にならないようにしている。

常連で囲まれると新規が入りにくい。週一來るか来ないかを目指している。

F.喋りたい気持ちを抑えつつ、聞き役に徹する。オープンクエスチョンで先に聞くだけ聞く。会話にはファシリテーションが求められる。

相手のことをよく見て、嫌じゃなさそうであればアセスメントする。アセスメントは1回のみでは無理で、1回で成果を求めない。よって、来なくなることが一番駄目で余白を残す必要がある。

G.明るく、自分をちゃんとしておく。私と喋ってる時間が気持ちいいようにしてもらおう、私と喋ってるのを見られてうれしいように

常連さんと喋ってるのを見て、一見さんがああいう風にしゃべりたいなとなり、店のことも好きになってもらえるように

行動の理由を聞き出す。

その人が入ることによって何かが変わることを提示する。次につながる、社会の変えたいいイメージに共感してもらう。いっぱい聞いて引っかかった時にドンと持って行くことは意識している。

域を超えると身構えちゃうから、この場所を楽しんでほしいっていう枠だから、仕事し

てる人感を出す。

H:人の話をうやむやにせず、理解しながら会話できるようにすること。同じ視点で会話できるように意識している

宝楽:動画モードでしゃべる。相手の話していることを映像で想像できるか。情景を共有する=情報を共有する

会話の目的があんまりない

【コーディネーターをするうえで意識していること】

A.自分が無理しない、しんどいことはしないということを意識。楽しく過ごす。

自分自身が人にしてもらってうれしかったことを相手にする。聞くことをモットーに。情報をいっぱい持つておく

B.安心してもらうような空気感を醸し出す。最初の印象で話しかけやすさが変わる。

あいさつするだけでも一回は関わるようにしている

何かわからなかったら聞けるわと思ってもらえたら、いったんつながっている。

認知の初期段階だったため、とにかく話しかけていた

みんなが居心地よく過ごせているかを大事にしている

C.失敗を出す。自分の感情や組織の状況など思ったことは伝える。

たまたまがいい。支援しに行ったら絶対届かない。上下関係のつながりになってしまう

D.できるだけ人が考えたやりたいことを形にできるように持って行けるようにしたいとは思っている。なぜその行動をしていて、これからどうしたいか、当たるか分からないけどいい案を出せるように。

イベント時などに話しかけて引っ掛かりを作っておく。場所のファンも人のファンも増やす。建築的にファンは増やせるけど、もっと知ってもらいたい。

多少図々しくても全体のためになることなら突っ込んでいこう(お米の仕分けなど)

E. 漏れていることに気づいたらやる。作業しておけば泉北ラボが気持ちいい空間になり続ける

自分の生きる感覚として余裕を常に持つておきたい。イレギュラーに対応できるようにした方が効率よく回る。

コーディネーターの一人になっている感覚。費用をある程度安くしてもらっている代わりに、運営に困ったら助けている

泉北ラボの価値が上がればカフェの価値も上がるし、逆もしかり。

カフェ＝ラボやし、ラボ＝カフェという考え方。財団の手が回っていないところもほったらかすんじゃなくてどっちもプラスになるように
キャパオーバーしないように見とくのと、宝楽さんの指示と違うことをしていないか見ておく。ちょっと道それそうなときは一声かける

入ったからには成長してほしい。その人にあった成長がみられるように手助けしてあげたい。ボランティアなので言い過ぎたら負荷になるし、逆に遠慮しすぎて言わなかったら何か見てもらえやん感じで難しい。人によって得意不得意あるし、人を見て願います。しんどくなりそうなときはどういう意味があるのか、どういう人が助かっているのか伝えるようにしている。(コーディネーターと関わるうえで意識していること)

F:話しかけやすいようにしている。エプロンをして、ぼーっとしないように。

入ってきた人には目を上げてあいさつし、所在がなさげなら話しかける。来られた方の様子は観察している

宝楽:世間話を大切に。ちょっとしたつぶやきを聞き逃さない。

先回りして判断せずに、その人が言っている言葉に耳をかたむける

何回も来るから信頼性が高まる場所。そんな関係を作るためにもいてほしい。

専門性よりも、信頼をもってもらえたり、こっちに関心を持ってもらえるような態度を一番大事に(コーディネーターに意識してほしいこと)

普通であること、プロでないこと、生活者の感覚。目線が合わせられることが必要かな。人に興味を持つとか、強いていうなら観察力。(コーディネーターに必要な力)

つながったら友達になれる。回数やねん、信頼って。コーディネーターはもっと声をかけてほしい(意識してほしいこと)

【泉北ラボで学んだこと、変化】

A.最初は勇気を出して話しかけに行っていたが、元々人は好きなので鍛えられた。コミュニケーションや話すことが楽しくなった。それが今のコミュニティナースにつながっている。

ちょっとずつコミュニケーションの成功体験を積み重ねていくことで、不安から自信に変わっていった

自分が当事者になって、今まで冷たい目で見ていたNPOに対する視線が変わった

弱者が支援を受けるのに抵抗を感じる人多い。しんどい時は頼るのも大切で、支え合いの仕組みが出来たらいいな

コミュニティーナースは人と街をつなげて元気にする役割で、泉北ラボでコミュニティーナースを紹介してもらい、経験を活かして現在の仕事につなげた

泉北ラボで温めてもらった後、自分のことを考えるようになった。そしてつらい思いをしている人にも紹介している

ここで温めてもらって社会復帰できた

B.巻き込むことが大事。手伝ってもらって。巻き込むことでみんなの居場所作った。ボランティアだとつぶしが利くので取り組みやすい(慈しみ市や Days にて)

社会に一石投じたいという思いから、人との交流を生み出すことが生きがいに変化した
つながっていないと何かが起こった時に共助できない。同じ空間を共有することでいざというときに共助できる。ラボはそれを日常で行っている。

Days とかラボでさらっと支援するのが物足りなくなった。一人にもっとコミットして救いたい

日常化。毎日ごちそうだと飽きてしまう。ケの日として作り上げること

0 → 1 で居場所が広がる場所を見れたのが大きな学び。人が変わって化学変化するのも面白い。

C.箱はやはり大事だということ。集まれる場所っていうスペースがあること自体が大事。しかし、利用者とコーディネーターがいないとだめで、両方必要。

地域の方とつながろうという泉北ラボのアプローチが大事。それがあって、人が集まってきたと感じた。

宝楽さんの経営姿勢を見れたことが学び。いい意味で経営視点をもとうと思った。見ることによりまなんだ。

D.みんないろんなことを考えている。多様な方がいてみんな気持ちがあって、自分の話を聞いてほしいと思っているし、自分自身人の話を聞くのが好きだから、どんなことを考えてはるんやろうと好奇心でやっている

世界はかえていけるなと思っている。泉北ラボは自由な場所で、自分のアプローチを見つけることが出来て、いろんなことができる。自分が場所と関わることで、その人の世界も変わっていけるし、私も変わっていけると思うようになった。

嫌なことがあってもしょうがないと思えるようになった。自分が否定されているわけで

はないし、今合わんかっただけでお互い考えが変わってまた会えるかなと思った。その時にその瞬間を最善尽くしたらいいんやって思った。全然尽くさんかったら後悔が残る。

E.学び続けている。コミュニティのこと、施設的なことは何も知らなかった。高田さんなどから地域にこういうものがあると学んだり、カフェ以外で関わる方と話すことによってその自分の知らない知識を身に着けられたら学びになる

コーディネーターは卒業してしまう。成長する+出会いがたくさんある

F:障がいを持っているかもしれない方と、前提がない中で話すことが勉強。相談窓口だと障がいをお持ちだったり障がいについて悩んでいたりする方が来られるが、泉北ラボは可能性がある人にいきなり障がい手帳の話などをすると驚いてしまうので、そういう人たちと上手に対話することについて学んだ。

多様な人が訪れる場所なので、より一層いろんな方がいることを学んだ

G.居場所と役割はセットである。役割をたくさん作ることで、それぞれができることで関わってくれる。(G氏の今までの経験から)

H:やりたいことに挑戦していても、仕事としてできることにたどり着くのは難しいと学んだ。

【コーディネーターの役割】

A.何かしたいなと思っている人には特技とかを聞いて情報提供+背中を押す一言

B.コーディネーター会議で共有と相談

C.雑談から困りごとを聞く。雑談自体が困りごとの解消にもなる。

ラボは施す・施されるみたいな感じを出さずに、カジュアルにコーディネーターが話して解決する。そういうのを狙っている。

コミュニティフリッジを正しく広めることもコーディネーターの役割。

支援をできる可能性を持っているのが場所であって、その中にコーディネーターがいる
D.地域声をキャッチするというのも必要なこと。皆さんがどういったことを考えているのかとか、何か困っていることはないとか、きめ細やかに対応している

インフォーマルな人であるからこそできることってというのが、グレーな人たちにどう対応するか

フリッジの利用者の声を寄付者につなぐ

G.フリッジでいうと、受益者を元気づけて寄付者にまわす、そこでコーディネーターが活躍するのは

行動の理由を聞きだす。言葉を引き出していって、その人が泉北ラボや地域に関われるように、コーディネーターの持っている引き出しの中の関りで決まるのでは。その人にあった紹介をして次へつなげるのがコーディネーターの役割。

H:SNSもあるから、現在は情報を自分で得て直接気になる活動や人に連絡できる時代。相手が何かをしてくれるわけではないから、プレイヤー側からすると、やりたいことを自分から伝えることも大事

【泉北ラボの課題】

B.生活していくレベルでお金を回しながら自分のやりたいことができるのか

継続的にかかわる際のお金と時間の問題

仕事味のなきっちり感がある。ふわっと感があった方が来やすい。

大学生とか経験が価値の子にはきっちり決まっているほうがいいかも

稼げる年代を巻き込もうと思ったら、そこがジレンマ

お金が稼げる予定を優先したいから、安易に復活と言いつらい

コーディネーターとして毎日いるのが風景を流れて見れて理想。週一だと単発っぽくなってしまう

C.フリッジ利用の方で、思いはあるけど小さいお子さんがいて時間的に制限がある方多い。心のケアが必要な方も。

感謝の意でお返しに何かしたい人と、日本の施しを良くないとする文化が申し訳ないからやります的につながっているのも多い

D.コーディネーターは必要だけど、体系的でなく何するのかきちんと言語化できていない。お金ではない価値観を言語化したい

E.ラボの課題は人員確保の必要性。山中さんの課題は自分以外が立つことも考えてサポートしすぎないこと。

F:コーディネーターが不足していること。気になることはコーディネーター日誌に書いているが、日誌も現在私しか書いていない。

知らない人には相談しづらいので、人がいないと次につなげられず、困りごとが浮上しきれしていないかも

G.お客さん+ちょっと関わる人を増やせば、めっちゃお客さん増えそう

宝楽.泉北ラボにいてると日常生活を送っているときよりも関係人口の倍増が3, 4倍、人によっては10倍くらいに増える。入ってくる情報量がバーンと増える。そうすると、何かしたいと思っているから火がついてすぐ卒業してしまう。

宝楽さんが忙しすぎてよくわからなくてやめた乗組員など、すぐ卒業してしまっていた。人がすごい回転していた。

【その他】

A.コーディネーターになった目的は、自分自身を温めて、気持ちを落ち着かせるため

鈴木さんに宝楽さんを紹介してもらってつながった(過去)

コミュニティフリッジの利用者交流会を考えたけど、コンセプトとずれていたのをやめた(入り込んで分かったこと)

B.つながる Days は宝楽夫婦のやってることと方向性が応援したいと思っていて、学べたらいいなと取り組んでいた(ラボに関わるモチベーション)

E.いろんな人に来てほしいこれからも(今後の展望)

お店をやるのにいろんな人が交流できる場所がいいなと思っていたので、ラボはちょうどよかった。(ラボに関わった理由)

ラボの機能を使う人が増えた。なぜかという、口コミかな。地道にやっているから必然的に届く人に届いている(ラボの変化)

学生が減っているけど、一般のお客さんの割合が増えた。2022年がコーヒー無料券と宝楽さんの知り合いで一番多かった。売り上げはあがっている。地域の方の集まりも増えた。(お客さんの変化)

G.制度からこぼれ落ちているということは引き上げられるのでは。当てはまらないことが強みになる。ラボに入って少しずつ話したりイベントを主催する仕組みがあればいいかな(ラボ以外の視点からのアドバイス)

東京はコミュニティが形成されていないから、災害時に自分を囲む、自分のことしか考えていない。一方、東北は、自分は持っていないけれどみんなで手を携えてみたいコミュニティが強く形成されていた(コミュニティに対する考察)

ボランティアの人は、ハードルを上げすぎないように、与えようとするのではなくて自分のためになる、ここで学ぼうとするぐらいの気持ちで接するのが大事

宝楽.泉北ラボは困ったを置いておくことで、つながりをはなびらのように増やしていく。小規模だけど多機能なことを提供できる。情報とか人のつながりとか社会のサポートを受けるってことを提供しているから、世間話をしないとそれ以上生き続けるものがない。(コーディネーターの配置目的)

世の中に点在しているバラバラ、困っている人を助ける仕組みをラボがコンシェルジュ。看掲げないためには、どんな目的できたかこっちに落としてもらわないと接続のしようがない(配置目的)

豊かな場所って選べることだと思う。地域に居場所を増やすことはやっているけど、日替わりコーディネーターも大事にしたい(理想のコーディネーターの在り方)

カフェは自然につながりが生まれる場所で、大事な機能。珈琲みたいな媒介ツールだと弱い。人を介して場を理解してもらう。(配置目的)

リンクワーカー＝コーディネーター(もっと広い意味でとらえる)

視察のことをコーディネーターから聞くことで、その人にとって意味がないと思っていた地域がちょっとうれしくなったりとか。その人の心とか好奇心を温められる。

植栽を壁にすることで、お互い一緒にいてることを感じ合いながら場所が成立している。これも人が媒介している。植栽を動かす時と気になるキーワードがあった時。

街に起こっていることを同時多発的に感じ合えるのが広場。これを小さい室内で実現させたかったけど、利害は対立する。教室と本を読む人がいて、本の方に今日は賑やかですみませんと言えば共存できる。これは人にしか進行できない。

世の中は規約で縛るけど、ラボは人とかものとか事がつながる場所だからコミュニケーションが大事。だから人。困ってる人が花びらみたいにつながるのも、大概の人は大丈夫っていう。だからまずは泉北ラボだったらしゃべっていいかも、仲良くなれるかもという信頼をもらう。そのためには課題があり、複数交差点で実現。

調整じゃなくて調和型コーディネーター。明るい場所で声をかけられたら気持ちよく感じる。

基本的に何かやりたい人がコーディネーターになってできる人を呼んでいる。(コーディネーターの役割)

GDP に対比するのは社会関係性資本だと考える。

日常のカフェとして利用することが出来る場所が地域にあることの大切さ。